京都盆地の弥生時代遺跡

伊藤淳史

1　はじめに

1971年，北白川追分町遺跡にあたる京都大学北部構内の，農学部総合館建設工事現場において，壺形土器の底部が採集された。淡褐色で厚手のこの土器は，弥生前期の資料として即座には喧伝されなかったけれども，翌年に約120 m 南の地点で実施された発掘で，この時期の土器をまとまって含む確実な包含層が，あらためて確認された。この当時，乙訓地域の一部でしか弥生前期の遺跡は確認されておらず，京都市域にいたっては，伏見区深草遺跡などを例外として弥生時代遺跡の存在そのものがほとんど知られていなかった。しかしながら，これ以降，1974年に上京区内膳町で弥生前期の包含層が確認され，また同じころ，地下鉄烏丸線建設にともなう調査によっても各所で弥生時代遺物が発見が続いて，京都市域には平安京期の遺跡の下層に弥生遺跡も遺存していることが明白となった。

もっともこうした顚末は，工事にともなう事前発掘の増加による副産物であって，加えて多くの弥生遺跡の発見は，都城遺跡の調査を主眼においていたこれら事前発掘の，そのまた副産物にしかすぎないものである。ただ，弥生遺跡が存在する可能性を少なからず認識していることが，目的の如何を問わない事前発掘にあっても新たな発見を促した側面は否定できない。これは現在においても変わることはないだろう。最初の発見以降現在に至るまで，京都市域で発見された弥生遺跡の調査事例は，他地域での弥生遺跡の調査と同列に論じられるものではないけれども，それでも膨大な数にのぼる。京都盆地の北部は，三方を山地に囲まれたひとつの巨大な扇状地であるが，この範囲の中で，年間数百件に及ぶ調査が実施されているという事実は，逆にみればこれだけの広範囲をこれほど密に調べている希な地域でもあるといえる。そのままでは無数の点の寄せ集めでしかないこれらの情報の中から，必要かつ有効なものを汲み取り，点的把握から面的認識へと高めていくための基礎的作業，すなわち弥生遺跡調査についての情報の集成を，本稿の第一の目的とする。

また，そうして明らかとなった遺跡も，孤立して存在しているわけではない。遺跡を群としてとらえる研究はすでに多くの事例があるが，弥生時代の京都盆地における先行研究はない。それぞれ遺跡の果たしていた機能について言及するには，あまりにも情報が乏しい現状にあるけれども，得られた情報から可能な範囲で遺跡の立地や存続時期などを明ら

かにし，そこから京都盆地における弥生社会の動向と地域的特質を読みとってさらなる研究の進展に役立てたい。これを本稿の第二の目的とする[1]。

なお，京都盆地といった場合には，広義には南山城までをも含み，狭義には京都市域から向日丘陵東麓および旧巨椋池あたりまでの範囲を示している。本稿では後者の意味で用いるとともに，桂川以西や宇治川以南の範囲も除外しており，西京区，および伏見区と南区の一部を除いた京都市域を対象とする意味で用いる。桂川西岸の向日丘陵東麓一帯は，数多くの弥生遺跡がある重要な地域であるが，対象とする遺跡数が膨大になりすぎるからである。幸いにして，この領域を対象とした先行研究はすでに提出されている[2]ことから，今回はそれらの成果を参考にするにとどめたい。また，時期区分は，『弥生式土器集成』を基本としたⅠ～Ⅴ期[3]に，関係を無視できない突帯文期を縄文時代晩期末として加えたものとする。Ⅴ期については時間幅が長いと予想されることより，可能な限り前半期・後半期に２分しておく[4]。庄内式期（Ⅵ期）以降は原則として考察の対象外とする[5]。これらは，報文に土器が図示されている場合にはそれにもとづいて判断し，それが無い場合には報告者の記述に従っている。出土土器にもとづく時間軸としては，編年研究の現状からみてあまりにも大枠であるとの感じをぬぐえないけれども，土器の図示されていない報文のほとんどがこの時期区分にのっとっており，とりわけ立合調査の成果が高い比重を占める京都市域においては，出土資料そのものも断片的であって，これ以外の時間軸で各遺跡の存続時期や併行関係を細かく求めることは，現実として不可能だからである。

2　遺跡の群別

さきに述べた時間的・空間的な対象内で，遺跡として58箇所を抽出し，それらを７つの群に区分した。ここで「遺跡」としたものは，集落や墓地などの性格は一切問わず，原則として遺構や包含層が確認されていることを基準としている。土器破片のみが二次堆積や流れ堆積中より少量出土している事例まで加えるとかなりの数にのぼり，それらの出土状況は報文により丹念に検討したものの，一部の遺跡とみとめ難いものは除外した[6]。各遺跡の概要と個別の検証は長きにわたるため，付編として「資料・京都盆地の弥生時代遺跡」を文末に加えることとし，ここでは表12にまとめた。なお，各遺跡の時期毎の状況を，ランク①：遺構などが確認されている，ランク②：遺構は未発見だが確実な遺物包含層は確認されている，ランク③：遺構・包含層とも未発見だが，遺跡ないしはその近隣であった可能性が高い，という３ランクに区別し，トーンの濃淡で表示した。

表12 京都盆地弥生遺跡の消長表（方周：方形周溝墓，竪住：竪穴住居址，蛤刃：太型蛤刃石斧）

群別	遺跡名	晩期末	Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期	Ⅴ期	主要な遺構と遺物
A群	1 岩倉忠在地							
B群	2 植物園北							土器棺（晩期末），竪住（Ⅴ期～）
C-1群	3 修学院小学校（沖殿町）							
	4 一乗寺向畑町							
C-2群	5 北白川上終町（北白川廃寺下層）							
	6 北白川小倉町別当町							
	7 北白川追分町（京大北部構内）							方周（Ⅱ期）
	8 吉田山西麓第1（京大本部構内）							銅鏃，蛤刃，磨製石鏃
	9 吉田山西麓第2（京大総合人間学部構内ほか）							
	10 吉田山西麓第3（京大医学部・病院構内）							
	11 岡崎							方周（Ⅱ期・Ⅳ期～），蛤刃
D群	12 芝町							有孔磨製石斧？
	13 旭山							石槍
	14 左義長町（山科本願寺跡下層）							
	15 中臣							土器棺（晩期末～Ⅱ期） 方周（Ⅱ・Ⅴ期），竪住（Ⅴ期）
	16 大宅（大宅廃寺下層）							土器棺（晩期末～Ⅰ期），蛤刃
	17 勧修寺旧境内							
	18 小栗栖							
E-1群	19 轆轤町							
	20 南日吉町							
	21 月輪							蛤刃
	22 稲荷山西麓（法性寺跡・正覚寺跡下層）							
	23 深草							
	24 谷口町							
E-2群	25 伏見城下町下層（桃山弾正町）							方周（Ⅱ期）
E-3群	26 鳥羽（離宮下層）							磨製石器各種
	27 下鳥羽（芹川）							土坑（Ⅰ期），方周・竪住（Ⅱ期～）
F-1群	28 柳池中学校（烏丸御池）							竪住（Ⅴ期末）
	29 高倉宮下層							石庖丁
	30 烏丸綾小路（長刀鉾町）							溝・土坑（Ⅱ期～），竪住（Ⅴ期） 石庖丁，絵画土器片（Ⅳ期）
	31 松原中学校							
	32 中堂寺南町（坊城町）							
	33 島原（堂ノ口町）							
	34 衣田町（西市下層，西七条市部町）							方周（Ⅴ期），磨製石鏃
	35 東塩小路町							
	36 烏丸町（東九条西山王町）							溝（Ⅴ期），蛤刃
	37 東寺町							
	38 唐橋							溝・土坑（Ⅱ～Ⅲ期）
F-2群	39 相国寺門前町							
	40 内膳町							炉跡？（Ⅰ期），石庖丁
	41 藁屋町（二条城町，七丁目，高陽院下層）							炉跡（Ⅳ期）
	42 烏丸丸太町							竪住（Ⅴ期～）
	43 豊楽殿跡下層							竪住（Ⅴ期～）
	44 上巴町							溝（Ⅲ期）
	45 壬生							溝（Ⅳ期）
	46 西ノ京勧学院町							石庖丁
	47 壬生車庫跡							
	48 西院							
	49 壬生高田町（京都市立病院構内）							溝（Ⅴ期末）
	50 西京極（西院月双町）							溝（Ⅱ～Ⅲ期），竪住（Ⅳ期～Ⅴ期）
G-1群	51 梅ケ畑銅鐸出土地			外縁付鈕式銅鐸4個				
	52 常盤東ノ町							
	53 和泉式部町							竪住（Ⅳ期）
	54 西野町							大形石庖丁
G-2群	55 北野（北野廃寺跡下層）							土坑（Ⅴ期）
	56 大将軍							溝（Ⅴ期～）
	57 西ノ京春日町							溝（Ⅴ期），磨製石鏃
	58 山ノ内山ノ下町							

凡例
ランク①
ランク②
ランク③

遺跡の群別については，立地条件や分布のまとまり具合を考慮して設定した。図79は，池田・大橋・植村氏の原図になる地形図をもとに作成し，各遺跡の位置を示したものである[7]。図中の各地点の番号が，表12における遺跡の番号と一致する。なお，この図79には，参考のために桂川西岸沿いの主要な遺跡についても位置のみ示した。以下に，それぞれの遺跡群の特徴を述べておきたい。

A　群　岩倉盆地内の遺跡。現在のところ明確に確認されているのは1岩倉忠在地遺跡のみしかみられない。

B　群　西を鴨川，東を高野川に挟まれた範囲の遺跡。中央部分の後背低地に東を限られるように2植物園北遺跡が広がる。その東側には遺跡は確認されていない。

C　群　比叡山の西麓及び西南麓に形成された扇状地上の遺跡。音羽川及び一乗寺川の形成にかかる扇状地を中心とする北半のC－1群と，白川による扇状地を中心とする南半のC－2群とに細別する。前者には3修学院小学校（沖殿町）遺跡および4一乗寺向畑町遺跡があり，後者は北東端の5北白川上終町（北白川廃寺下層）遺跡から南西端の11岡崎遺跡まで，広範囲に間断無く遺跡の分布をみる。なお，このC群は，岡崎遺跡を除いて縄文時代各期の遺跡とも分布の重なりをみる。

D　群　山科盆地内の遺跡。地形的にも他の群とはやや隔絶された条件にある。山科川と旧安祥寺川にはさまれた段丘上に位置する15中臣遺跡のほか，扇状地周囲の丘陵沿いにも遺跡が点在する。立地上はこれらは区別されるけれども，完結した範囲内にあって相互に有意な関連をもつと予想し，ひとつの群としてくくる。

E　群　東を東山および桃山丘陵に限られ，西と南を鴨川と宇治川に限られる範囲内の遺跡。E－1～3の3つに細別する。E－1群は東山丘陵西麓の諸遺跡であり，その北半は19轆轤町遺跡，20今熊野日吉町遺跡など実態の不明な遺跡が多いが，南半は低地にある23深草遺跡のほか，22稲荷山西麓遺跡で各期の包含層が確認されている。北半については，実態が明確になれば扇状地や丘陵上の比較的高所にある遺跡群として細別できる可能性がある。E－2群は桃山丘陵に展開する遺跡。南端で25桃山城下町下層（桃山弾正町）遺跡のみ実態が明らかであるが，他にも遺跡が存在する可能性はある[8]。E－3群は鴨川東岸の後背低地及び自然堤防上に展開する遺跡。26鳥羽（離宮下層）遺跡および27下鳥羽（芹川）遺跡は，ともに弥生期の豊富な遺構・遺物の出土が知られる。

F　群　鴨川と桂川に挟まれた扇状地上を中心に位置する遺跡。南半のF－1群と北半のF－2群に細別する。設定の根拠は，この扇状地上における遺跡の分布が北東から南

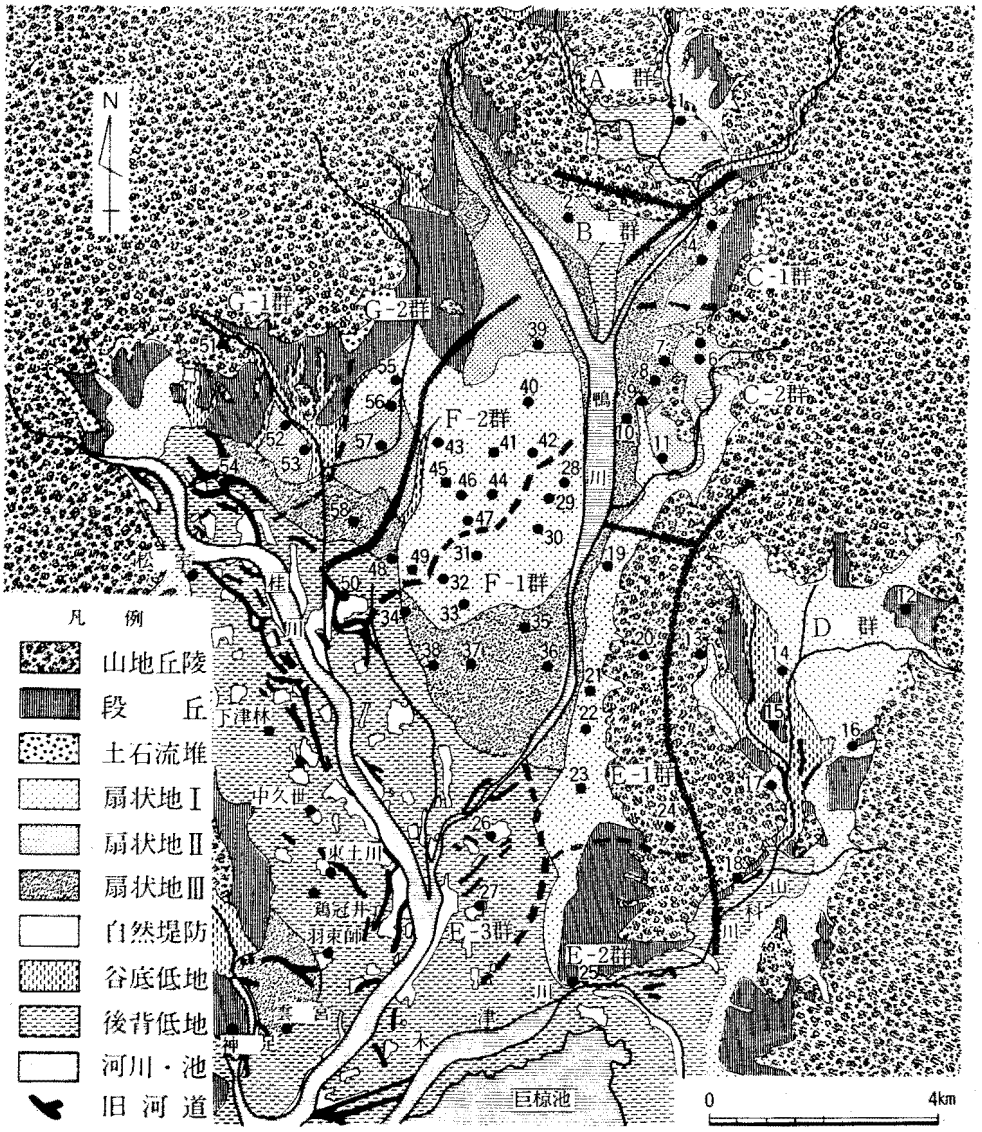

図79 京都盆地の地形と弥生時代遺跡の位置　縮尺 1/15万（注７文献所収の図をもとに作成）

西方向に列状を呈していることと，調査時に検出される各期の流路状遺構はいずれも北東から南西方向を基本としていることなどから，小規模な谷状地形を東西に横断するのではなく，想定されるこの扇状地の当時の地勢に従う形の北東～南西方向を軸とするまとまりが，より有意な関連をもつと考えるからである。堀川は，本来天神川の形成による扇状地と鴨川によるそれとの間に形成されたもので，二条城付近から南西流したと想定されている[9]。

したがって，F群とG群との境界や，F群を２つに細別する場合には，こうした見解も考慮している。F－１群は，中心に30烏丸綾小路（長刀鉾町）遺跡が広い範囲を占める。なお，35東塩小路町遺跡から38唐橋遺跡までの南部に位置する４つの遺跡は，内容が不明な点も多いが，それ以外の遺跡とは立地が異なるものとして，F－１群のなかでもさらに小さなまとまりとしてくくり得る可能性がある。F－２群の場合も，48西院遺跡や50西京極（西院月双町）遺跡などは，桂川沿いの後背低地や自然堤防上に立地するもので，同様に小さなまとまりとしてとしてくくり得るかもしれない。

G　群　西北部の丘陵・台地沿いを中心に位置する遺跡。御室川を境にして西半のG－１群と東半のG－２群に細別する。G－１群は，御室川西岸沿いの微高地に立地する52常盤東ノ町遺跡と53和泉式部町遺跡が中心となる。54西野町遺跡は桂川東岸の後背低地内に含まれ，やや離れた位置にあるが，便宜的にこの群に含めておく。また51梅ケ畑銅鐸出土地は，御室川の上流にあり，下流に展開する遺跡と密接な関係をもつものと考え，ここに含める。G－２群は，紙屋川・天神川沿いの微高地に位置する遺跡。西陣台地と呼ばれる低位段丘や，新期の扇状地がこの中に含まれる。実態不明な遺跡が多いが，確実に数遺跡は分布するものと考える。

3　遺跡数の推移

さて，以上の各遺跡群に含まれる58の遺跡は，実態の良くわかっているものとそうでないものがあるけれども，ここではひとまずそうした条件を捨象し，時期毎の遺跡数の増減を検討することからはじめてみたい。

図80は，51梅ケ畑銅鐸出土地を除いた時期毎の遺跡数の推移を，遺跡の継続状況も把握可能なようにグラフ化したものである。例えば，Ⅰ期の遺物が出土している遺跡は19あるが，このうち14遺跡は晩期末の遺物もともに出土しており，Ⅰ期から新たに出現したと想定される遺跡はそれ以外の５遺跡であることがわかる。こうした見方でいくと，晩期末以降Ⅴ期に至るまでの継続が想定される遺跡が５遺跡あることになる。もっとも，ここでの遺跡の継続とは，あくまで土器の出土のみにもとづいたものであり，必ずしも同一地点での継続した居住を示すものではない条件付きのものであることには留意しておきたい。すなわち，付編における各遺跡の調査の詳細な検討から明らかなように，遺跡範囲内で時期毎に地点を違えていたり，あるいは京都大学構内での所見にみとめられるように，Ⅰ期末ごろの大規模な洪水砂の堆積によって地形環境が大きく変化し，目の粗い土器編年でみれ

ば時期的に継続した土器の出土と判断されても，同一条件下で遺跡が継続していたとはみとめ難い場合もあるからである。

こうした制約を十分に考慮しても，顕著な現象としてみとめることができるのは，V期における遺跡の爆発的ともいえる増加である。V期の39遺跡のうち，半数以上が新たに増加したものであり，とりわけ出土土器の実態が明瞭な遺跡でみるとV期でも後半期にはじまって以後継続していく遺跡が多い[10]。また，晩期末以降の継続が想定される遺跡であっても，例えば2植物園北遺跡や15中臣遺跡のように，中期あるいは中期後半期に非常に希薄であった資料がV期に至って再び急激な増加をみる遺跡もある。すなわち，遺跡数の推移からみた場合，IV期とV期の間に大きな画期の存在が推定される。さらに，V期を除くと各期の遺跡数は微増・微減がありながらもほぼ横ばいと言えるけれども，これは晩期末の遺跡がそのまま継続しているわけではなく，それが漸減していくなかでI～IV各期に遺跡が出現し，結果として総数は横ばいとなっているにすぎないことがわかる。そして，これらI期以降出現の遺跡も，すべてがその後に継続していったわけではない。つまり，弥生時代を通じた全体としての遺跡の継続性の乏しさも，ここからうかがえると言えよう。

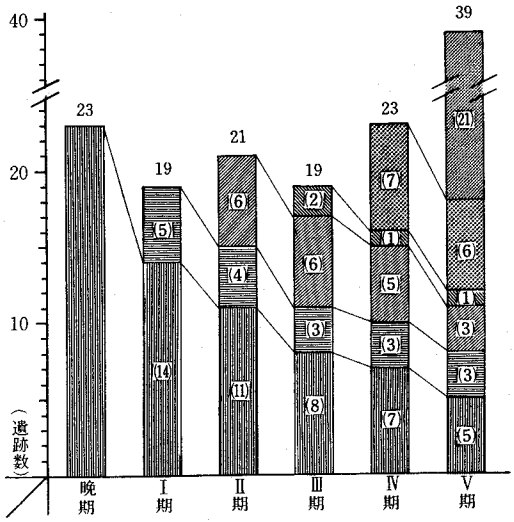

図80　時期別遺跡数の推移

以上の結果は，表12にまとめた各遺跡の実態とを対照させてみると，より具体的に知ることができる。しかし一方で，IV期の遺跡については，とりわけIV期に新たに出現した遺跡[11]については，V期前半の資料の欠落という傾向を含みながらではあるが，そのままV期に継続する傾向もまた，みとめられるといえる。すなわちV期の39遺跡中，IV期から出現して継続してきた遺跡とV期に新たに出現した遺跡を合わせると27遺跡となり，それだけで3分の2以上を占めていることになる。ここから，V期における遺跡数の爆発的増加は，すでにIV期にその兆候が表れているとみることはできないであろうか。

それでは次に，こうした問題をさらに詳しく調べるために，各遺跡の分布や立地条件を時期毎に追跡してみよう。

4　遺跡分布の変遷

図81－１～４は，それぞれ縄文晩期末～弥生Ⅰ期，弥生Ⅱ期～Ⅲ期，弥生Ⅳ期，弥生Ⅴ期の遺跡分布を，図79で用いた地形図に示したものである。

縄文晩期末～弥生Ⅰ期については，Ａ群の岩倉盆地とＥ－１・２群の東山丘陵西麓，それに京都盆地西北部を中心とするＧ群には遺跡の分布はみられない。Ｆ群は，遺跡そのものは数多く発見されているけれども，明確に遺構や包含層が確認され出土遺物が豊富であるのは，29高倉宮下層遺跡および40内膳町遺跡など東北部のごく一部にすぎない。また，縄文時代以来長く継続してきているＣ群の比叡山西南麓の諸遺跡は，晩期末まではほぼ全ての遺跡で，Ⅰ期までは７北白川追分町遺跡以南で継続が想定される。すなわち，遺跡の分布は鴨川水系を軸とする盆地の東北部に偏っている状況が看て取れるのである。これより，弥生時代のはじめころには，鴨川が重要な役割を果たしており，同時に，縄文時代以来の活動領域が強く意識されていたものと考えられよう。ちなみに，Ｄ群の山科盆地においても，晩期末と前期のまとまった遺構・遺物がみとめられる15中臣遺跡および16大宅遺跡は，ともにそれ以前の縄文中期末～後期の遺跡でもあり，以上の傾向と矛盾しない。

弥生Ⅱ期～Ⅲ期については，それまで遺跡の分布をみなかった西北部にもわずかながら遺跡が出現するとともに，東山丘陵西麓にも23深草遺跡のように豊富な遺物出土をみせる遺跡があらわれる。さらに，桂川に近い南部の扇状地縁辺から後背低地にも確実な遺跡の分布をみとめるようになる。一方逆に，密度の濃い分布をみせていたＣ群は希薄となり，Ｆ群の北辺の諸遺跡もこの時期にはほとんど継続してない。すなわち，全体として，前時期とは異なる南部を中心とした遺跡分布になるといえよう。また，13旭山遺跡，27伏見城下町下層（桃山弾正町）遺跡といった，丘陵上の高所や段丘面にまで遺跡分布をみるようになるのも，この時期の特徴的現象ととらえたい。向日丘陵東麓においても，向日市北山遺跡など，中期の段階で他と異なる高所に営まれる集落が出現しており，特に13旭山遺跡はこれと同様な，特殊な性格を帯びた遺跡と推定される(12)。

弥生Ⅳ期については，分布の傾向はそれ以前と大きく変化していないが，前節でも触れたように，Ⅴ期に継続していく遺跡が西北部の比較的標高の高い地点にみとめられるようになる。一方で，それまで長らく継続してきた15中臣遺跡は，この時期に資料が非常に乏しくなるようであり，Ｄ群の山科盆地全体でも遺跡はみとめられなくなる。また，前時期に丘陵や段丘面に分布をみせた遺跡も，この時期に継続するものはみられない。それ以外

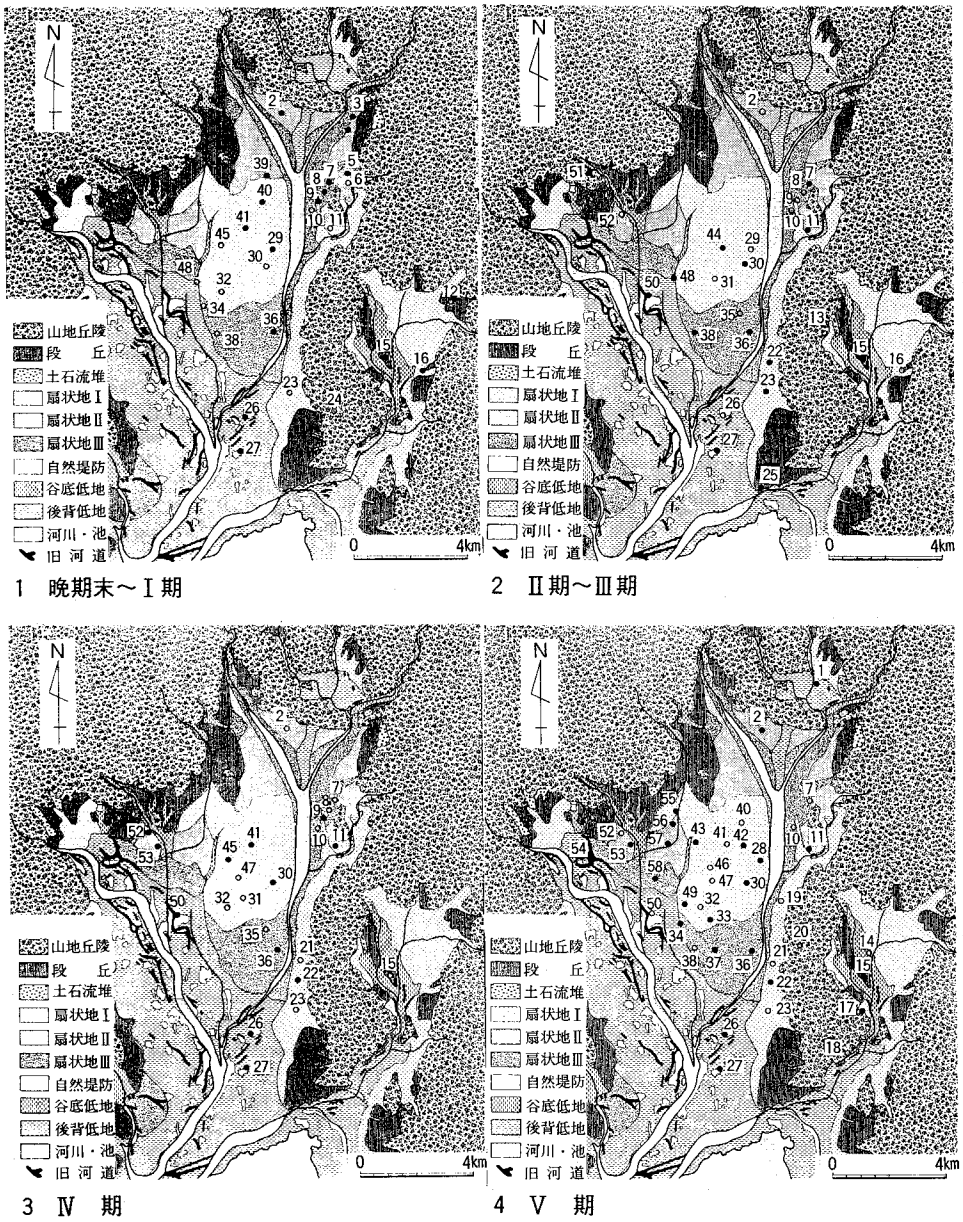

図81　時期別遺跡分布の推移　縮尺 1/30万

でも，前時期に豊富な遺物出土をみた23深草遺跡のように，遺跡の中心はこの時期には近接する22稲荷山西麓遺跡へと移っているなど，前時期とは地点を違えている例が多い(13)。

弥生Ⅴ期については，盆地全域に遺跡の広がりをみるようになる。A群の岩倉盆地，そしてG群の大半はこの時期に出現したものであって，北辺部や天神川流域の段丘面を広く活動領域に取りこむなど，従来利用していなかったいった地形環境を可能な限り克服していることがわかる。こうした傾向は，例えば53和泉式部町遺跡において，Ⅴ期以降展開していく遺跡でわずかながらⅣ期の住居が確認される状況が端的に示すように，G群についてはすでにⅣ期においてその兆候が表れていたことがわかる。Ⅴ期以前からの傾向という点で言えば，C群の比叡山西南麓については，晩期末に濃密な分布を示して以降は希薄となっていく状況が継続するとともに，確実に確認される遺跡は時期を経るにつれてより南へと移っていることがわかる。Ⅴ期においては，遺構がみとめられるのは11岡崎遺跡のみであり，それ以外では，7北白川追分町遺跡以南で散発的な遺物出土をみるにすぎない。ちなみにこの傾向は庄内期以降より明瞭となり，岡崎遺跡以外での遺物出土はほとんどみられなくなってしまう(14)。

5　各遺跡群の特質

以上，時期毎の遺跡の分布と立地について，京都盆地全体の傾向を追跡してみた。この結果から，最初に設定した各遺跡群の領域としての特質を，以下のように規定したい。

A群は，Ⅴ期以降に開発がなされる領域である。

B群は，Ⅰ期に活動領域となるものの，本格的な開発はⅤ期に至ってからなされる領域である。Ⅱ～Ⅳ期に全く活動の証拠がみとめられないわけではないけれども，広域かつ活発なものではない。

C群も，Ⅰ期には活動領域となっているものの，やはりⅡ期以降の活動は活発ではなく，Ⅴ期に至って，北半の放棄と南辺での活発な開発が開始される領域である。

D群は，Ⅰ～Ⅴ期を通じて活動領域となっている。ただし，Ⅳ期には空白が存在するようであり，また，周辺丘陵部も含めた広域が対象となっているのはⅡ期までである。いずれの時期も，15中臣遺跡が中核的な役割を果たしており，とりわけⅡ期以降は中臣遺跡を中心とした山科川沿いに集中した開発がなされたものとみられる。

E群も，Ⅰ～Ⅴ期を通じて活動領域となっている。ここで各期を通じて中核的な役割を果たしたのは，E－3群の26鳥羽（離宮下層）遺跡および27下鳥羽（芹川）遺跡の位置す

る後背低地と自然堤防を中心とした領域であり，E－1・2群の扇状地や段丘面を中心とした領域は，時期毎に地点を違えて小規模な活動が断続的に営まれつつV期を迎えたと想定できる。

F群もまた，群全体としてみればI～V期を通じて活動領域となっているけれども，そのあり方は南半のF－1群と北半のF－2群とで大きく異なる。F－1群では，I期には北辺を中心としているようであり，II期以降は，30烏丸綾小路（長刀鉾町）遺跡が中核的な役割を果たしつつ，南部の扇状地縁辺を中心として断続的な活動が活動が営まれ，V期至って再び全域で活動が活発化している。一方F－2群は，I期において北辺が活動領域の中心となっているものの，その後に継続せず，時期毎に地点を違えて小規模な活動が断続的に営まれつつV期を迎えた状況がうかがわれる。

G群は，II期以降にわずかながら活動が開始されたが，全域での活発化はV期以降になされた領域とみなされる。

このように特質を規定したなかで，活動や開発といった表現は，時代的な背景を考慮して，可耕地の獲得と拡大の行為をおもに念頭に置いている。もっとも，それぞれの領域内での活動がそれのみにとどまったわけではなかろうが、現状では検討する手だてを全く欠いているのである。

さて，ここでは以上にまとめた各群の領域としての特質を，次の3つの類型にまとめて整理しておきたい。

継続類型　弥生時代を通じての活動が想定できる領域。D群・E群・F群が該当する。ただし，全域が通時的な対象となるわけではなく，おおむねそれぞれ拠点的な遺跡が存在し，活動が安定して継続される中核となる。それ以外については，時期毎に地点を違えており，同一地点での継続性にはとぼしい。なおD群はここに含めているけれども，IV期の資料が希薄な15中臣遺跡において，今後の資料蓄積によってもその状況が変わらなければ，次に述べる断続類型に含める必要が生じてこよう。

断続類型　弥生時代開始期の活動が想定されるものの，それ以降の活動は活発とならず，IV～V期に至って活発化する領域。B群・C群が該当する。ただし，C群の場合は，I期とV期とでは明らかに活動の中心地点を違えている。

V期新出類型　IV期までの活動は希薄であり，V期において活発な活動がされる領域。A群とG群が該当する。これらは主として盆地周辺部の段丘面や，扇状地でも標高の高い地点が中心となる。

6　京都盆地の弥生社会

これまで，もっぱら盆地内における遺跡の分布と立地から，遺跡群の設定とその特質を，資料的な制約の大きさを捨象して，大胆に推測して述べてきた。最後に，他地域における研究史や土器地域色の検討事例との照合もまじえて京都盆地弥生社会の特質について触れ，まとめとしたい。

弥生時代遺跡の動向から社会の復元を試みた研究は，山城の向日丘陵東麓[15]，摂津[16]，大阪湾沿岸[17]，奈良盆地[18]，近江[19]など，近畿地方やその周辺部各地で提出されているほか，港北ニュータウンを対象とした田中義昭の一連の研究[20]も，研究史上の意義は大きなものがある。これら諸研究の特徴は，一定領域内に拠点集落の存在をみとめ，周辺小集落との有機的な結合を想定することから弥生社会の構成に迫ろうとすることと，そうした領域内での各遺跡の動向から個別領域毎の特徴を導き出し，領域の集合としての地域社会の動向を探ろうとすることの，２つの方向性に集約されると言えよう[21]。

本稿では，設定した７つの遺跡群を，最終的に領域として３つの類型にまとめた。このうち「継続類型」は，これまでの研究で各地域での弥生遺跡群の標準的なあり方としてみとめられてきたものであるが，例えば摂津安満遺跡周辺をモデルにかって示されたように，拠点集落が中期において拡張発展し，領域内で母村－子村の緊密な紐帯が形成されているかどうかは，京都盆地においてはいずれも定かではない。Ｅ群やＦ群などのあり方からみると，むしろ，やや継続性のある集落の周辺で，散発的・断続的に地点を違えて小規模な活動が行われたにすぎない可能性が高いと思われる。また，Ｖ期における遺跡数の増加という近畿地方全体の傾向に従っているのが「断続類型」や「Ｖ期新出類型」と言えるけれども，向日丘陵東麓をはじめとして，こうしたＶ期における遺跡の増加はその前段階の中期における拠点集落の発展と分村の形成を前提にして理解され，かつまた前期古墳出現と関連した集団再編などの動向とみなされているのに対して，京都盆地では前期古墳の出現はみられず，弥生中期における発展を前提とはしていない。したがって，京都盆地の弥生社会が，奈良盆地などにみられるような，拠点集落を核にもった基礎地域が並存して存在する空間[22]としては認識できないことは明らかであろう。同時に，向日丘陵東麓にみられるような，前期古墳出現に至るまでの安定した領域形成がなされなかった地域であることもまた，確かであると思われる。

それでは，京都盆地の弥生社会では他と異なるいかなる集団構成であったのであろうか。

この問題を具体的に明らかにするには，現状ではあまりに個々の遺跡の実態が不明瞭であると言わざるを得ない。ただ，多様な地形環境において，農耕にふさわしい場所を求めて短期の移動を繰り返しているといった状況では，土地との結びつきも比較的希薄で，柔軟な構成原理に基づくものではなかったかと推測しておきたい。地域総体としての遺跡の継続性の無さ，そして，例えばF－2群が示すような時期的に補完関係を示す遺跡分布のありかた，また，C群に示されるような時期を追うごとに遺跡地が南下していくありかたなどからは，いずれも領域を定めての安定した展開の様子をうかがうことはできない。V期における遺跡数の爆発的増加は，人口の増加と，多様な地形条件を克服せしめた技術的な革新との双方が少なくとも背景にあったであろうが，こうした現象が，他地域と異なり前期古墳の構築へとつながることがなかったのは，それ以前までの事情からみて，成熟した集団組織をその内側に備え得ていなかったことに起因しているとみたい。

また，集団間の関係を推し量るうえでは，出土遺物の検討は欠かせないであろう。これまでなされてきた土器の地域色の検討例からは，とりわけII期以降については，桂川以東における近江系土器の出土量の多さが指摘されてきている[23]。もっともII期については，甕形土器はいわゆる「大和型甕」とも調整などの技法的共通点を強く有しているものでもあって，桂川を挟んでの甕形土器の差異は，その共通点上での末端的特徴の違いにとどまり，全く異質の甕形土器が対峙しているわけではない。その前段階のI期までに淀川水系を中心とした西からの文化の流れがあったとする前提にたつならば、II期に至って、西側の摂津地域ではなく、むしろ南側の大和地域と東側の近江地域とを含めて類似の甕形土器が並存するに至っている点が注意されるべきである[24]。すなわちこの段階では、桂川という境界線は、類似の甕形土器を有する地域圏内でのもので、京都盆地の諸集団がそのなかでより東側の地域との交流に傾斜していたために認識されているにすぎない、ととらえられよう。ところが、特にIV期以降に関しては、近江系土器と呼ばれるものの意味あいが以前とは全く違い、他地域とは技法的特徴も含めて異質なものと考えて良いと思われる。こうした、いわば「共通性のなかでの特徴の相違」による境界線から、「異質なものの量的な相違」の境界線への変容は、集団間の交流の強弱の変化にとどまらず、人的移動も含めた集団間関係の変化を示すものと言え、おおむねそれに対応する状況でIV期～V期に京都盆地での遺跡分布の変化や数の増加がみとめられることは、極めて示唆的といえよう。

以上は、京都盆地の諸集団全体と他地域のそれとのかかわりを漠然と眺めたにすぎない。盆地内での集団間の関係が、遺跡あるいは遺跡群間で上述の状況に対応していかに変遷し

ていったかについては、検討まで達しなかった。ただ，弥生時代の開始期には鴨川水系が重要な役割を果たしていることと，その後の安定した継続的活動は北部では成し得ず，後背低地を含んだ南半部を中心としていることから，桂川と鴨川の分岐点の自然堤防上に位置して継続するE－3群の遺跡の実態が，地域間のみならず、盆地内の遺跡間関係をも解明する鍵を握っているものと、ここでは予想しておきたい(25)。

いずれにしろ本稿は、20年余りを経てようやく増加してきた遺跡の立地と分布に焦点を当てて検討を加えたものであって、今後のより深い検討のためのひとつの叩き台として，不十分ながらあえてその呈示を試みてみたものである。目下のところ遺物の分析に即した吟味を全く行い得ていない。そうした作業を果たしつつ、不備な点はいずれも今後の課題として稿を改めることにしたい。

なお，報告文献の収集に際しては，㈶京都市埋蔵文化財研究所資料課　中村　敦氏の手を煩わせた。この場を借りて厚く御礼申し上げたい。

〔注〕

(1) 本稿では京都盆地全体としての特質を読みとることを目的とするが，同時に，資料的条件に恵まれたそれぞれの遺跡群，あるいは個々の遺跡といったより微細な単位でも，詳細な検討が必要であろう。こうしたレベルでの議論については，筆者は，京都大学構内遺跡をはじめとする比叡山西南麓の遺跡群に焦点を当てた別稿を用意しており，これに譲りたい。

(2) 岩崎　誠「桂川右岸の弥生遺跡」『長岡京』第29号，1983
都出比呂志「第二章　弥生時代」『向日市史』上巻，1983

(3) 佐原　眞「畿内地方」『弥生式土器集成』本編２，1968
なお，Ⅲ期とⅣ期の区分に関しては，破片資料からの同定が主になることを考慮して，凹線文出現以後はⅣ期として扱っている。

(4) Ⅴ期前半と後半の区別は，近年提出された森岡秀人による編年観に従って，おおむねⅤ－１・２期の特徴をもつものを前半期として考える。ただし，Ⅴ期後半と記載されただけで遺物の呈示がない場合は，報文の記述に従っている。
森岡秀人「山城地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ，1990

(5) 弥生後期あるいは弥生末期として報告されているもののうち，土器の呈示がなかったり，明確には区別し難い破片の出土であるもののうち，一部は庄内式期に下る可能性も否定できないものもある。そうした場合，原則としては報告者の記載に従っている。

(6) 除外されたものは，出土土器が摩滅した小片でその頻度が低いものである。逆に，純粋な包含層の確認はなくても，土器の遺存度や出土頻度が高く，明らかに近隣に遺跡存在が推測される場合は，遺跡として取り上げている。

(7) 池田　碩・大橋　健・植村善博「京都盆地の地形」『京都歴史アトラス』，1994

(8) 京都市遺跡地図には，弥生期の遺跡として，959長岡越中遺跡（伏見区桃山越中北町）が登録されている。打製石鏃とししみ貝採集とされるが，報文はなく実態不明なため，取り上げなかった。
京都市文化観光局『京都市遺跡地図台帳』，1986

(9) 石田志朗「京都盆地北部の扇状地 ── 平安京遷都時の京都の地勢 ──」『古代文化』34-12，1982

(10) Ⅴ期前半のまとまった資料が出土している遺跡としては，15中臣および30烏丸綾小路を挙げ得るのみである。さらにⅤ期初頭に限定すると中臣遺跡の住居祉出土資料のみとなり，土器編年の上からも該期の欠落は注目される。

注

(11) 41藁屋町遺跡のように，それ以前に一度その地での活動が推測される遺跡も含まれている。

(12) 一般的には，政治的動乱に対応した高地性集落として理解される。ただし，中期段階のものとV期のものは，同質のものではないだろう。なお，向日市北山遺跡は元稲荷古墳の墳丘調査中に封土内から遺物が出土したものである。II期からV期までの遺物が含まれるとされる。

都出比呂志「元稲荷古墳前方部墳丘の調査」（京都大学文学部考古学研究室・向日丘陵古墳群調査団「京都向日丘陵の前期古墳群の調査」所収）『史林』54-6，1971

都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係 ── 淀川水系を中心に ──」『考古学研究』20-4号，1974

(13) 30烏丸綾小路遺跡の場合も，III期までの遺物がまとまって出土する地点とIV期以降のそれとは地点を違えている。付編参照。

(14) 7北白川追分町遺跡に含まれる京都大学BJ 31区で，布留期の近江系甕形土器が微量出土している。ただし，流路内での堆積で各時期のものと混在して出土した。付編参照。

(15) 前掲注(2)文献

(16) 原口正三「稲作と鉄器の時代」『高槻市史』第1巻本編1，1977

都出比呂志『日本農耕社会の成立過程』，1989，pp. 211-231

(17) 寺沢　薫「大阪湾沿岸地域における弥生時代遺跡群の展開とその社会」（上）・（下）『古代学研究』第72号・第73号，1974

(18) 石野博信「大和の弥生時代」『橿原考古学研究所紀要　考古学論攷』第2冊，1973

寺沢　薫「大和弥生社会の展開とその特質 ── 初期ヤマト政権成立史の再検討 ──」『橿原考古学研究所論集』四，1979

丸川義広「弥生時代遺跡の展開と生活空間の拡大」『奈良県史』1地理 ── 地域史・景観，1985

山川　均「単位地域論 ── 奈良盆地における弥生集落を中心に ──」『橿原考古学研究所紀要　考古学論攷』第17冊，1993

(19) 杉本源三「近江弥生社会の動態」『古代学研究』第119号，1989

(20) 田中義昭「南関東における農耕社会の成立をめぐる若干の問題」『考古学研究』22-3，1976

田中義昭「南関東の弥生時代集落」『考古学研究』25-4，1979

田中義昭「弥生時代集落研究の課題」『考古学研究』31-3，1984

なお，これらについては，近年，土器編年の整備によって再検討されている

安藤広道「弥生時代集落群の動態 ── 横浜市鶴見川・早渕川流域の弥生時代中期集落遺跡群を対象に ──」『調査研究集録』第8冊，1991

(21) 酒井龍一は，拠点集落の構造と分布に焦点を当てて弥生社会の構成を復元する一連の研究を提出している。ただし，遺跡の群把握，ならびにその立地や消長の検討という視点ではないため，従来の研究とは方向性の異なるものと理解している。

酒井龍一「大阪湾沿岸地域における弥生セトルメントシステム」『考古学論集』第二集，1988

酒井龍一「拠点集落と弥生社会 ── 拠点集落を基本要素とする社会構成の復元 ──」『日本村落史講座』2・景観I（原始・古代・中世），1990

(22) 前掲注(18)文献

(23) この点はかなり以前から指摘されているけれども，国下多美樹が詳細な検討を実施している。

国下多美樹「近江系土器について」『京都府弥生土器集成』，1989

(24) 大和型甕の成立については、伊勢湾地方の条痕文系土器との関係を指摘する研究がある。

松本洋明「弥生土器の考察 ── 弥生時代中期の大和型甕をめぐって ──」『末永先生米寿記念献呈論文集』乾，1985

若林邦彦「弥生土器地域色顕在化の構図 ── 中期前葉の近畿とその周辺の甕形土器の製作技法と系譜を中心に ──」『大阪府立弥生文化博物館研究報告』第2集，1993

(25) 国下多美樹は，注(23)文献で近江系土器の出土傾向から「交流の中核的集落」の存在を指摘し，中期では長刀鉾町（烏丸綾小路）・深草・中臣，後期では中臣・岡崎・今里の各遺跡を挙げている。筆者は，あくまで遺跡の立地と継続性のみからの解釈ではあるが，交流の中核としてふさわしいのはE－3群の25鳥羽遺跡・26下鳥羽遺跡ではないかと想定している。ただしこの場合，近江との交流のみではなくて，桂川西岸との交流をも含めた意味での「交流の中核」と考えたい。

付編：京都盆地における弥生時代遺跡の調査

この付編は，本文中でとりあげた58遺跡について，それぞれの内容を検討したものである。遺跡の番号は，図79および表12など本文中で用いたものと一致している。複数の呼び名がある遺跡名は（）内に併記している。また，関連する文献を集成して文末に文献一覧としてまとめ，各文献は遺跡毎に整理して番号を付した。各遺跡は，関連する調査地点を中心にして図84～図91に詳細な位置を表示しているが，その際の地点番号もこれら遺跡・文献番号と一致している。したがって，文中の（）で表記した番号は，文献番号と地点番号双方に対応する。ただし，同一調査で複数の文献が存在する場合，地図中には最も主要な文献番号のみを表記している。なお，「史」は『史料　京都の歴史』第２巻・考古（京都市，1983）において，「市」は『京都市遺跡地図』（京都市文化観光局，1986）において，また「府」は『京都府遺跡地図』第４分冊・第２版（京都府教育委員会，1989）において，それぞれ使用されている遺跡番号であり，今回とりあげた遺跡で該当しているものについてのみ示した。本稿で遺跡を検討する際には，上記３つの文献に登録された遺跡を最初の手がかりとし，さらに『京都府南部における弥生時代遺構・遺物確認一覧表』（第６回調査成果交流会資料，1982）を随時参照した。ただし，それ以外にも報告文献のみからとりあげた遺跡もある。報告文献は，1995年３月現在までに，何らかの形で調査内容が公表されているものである。遺漏や誤りも多いと思われるが，今後逐次追補訂正につとめたいと考えている。

〈Ａ群の遺跡〉

１．岩倉忠在地遺跡

史79，市244，府23－23

京都盆地最北にある遺跡である。76年に同志社大学岩倉校地内の試掘調査でⅤ期末の土器を含む包含層が確認されているほか（１－１），90年の南域での発掘調査では同期の土器が埋没林をともなう湿地から出土している（１－５）。一方，この北方の洛北中学校内での発掘調査でも，Ⅴ期～古墳時代の包含層から土器の出土が報告されているほか（１－４），周辺で実施された立合調査では庄内期の包含層が確認されている（１－３）。現在までのところ明確な遺構の確認はないものの，岩倉川の旧流路と想定される堆積から広範囲にわたって遺物の出土をみていることから，遺跡は，Ⅴ期後半以降の時期を中心にして，岩倉川東岸の扇状地微高地上に帯状にひろがっていたものと想定される。なお，遺跡とは離れるが，幡枝の丘陵では偏平片刃石斧が採集されている（１－６）。

〈Ｂ群の遺跡〉

２．植物園北遺跡

史52，市134，府23－30

1979年度以降に北山通り以北で実施された広域立合調査によって確認されてから，現在まで発掘調査は13次に及んでおり，それら各次の調査概要は（２－11・14）などにまとめられている。調査次数もこの文献に従った。全体の成果を一覧すると，時期は晩期末～Ⅰ期およびⅤ期後半以降を中心とし，広範囲に指定されている遺跡範囲のうち，中央にある１次（２－３）・２次（２－４）調査区で弥生期の顕著な遺構や遺物がみつかっていないことから，上賀茂小学校付近の北部と，植物園一帯を中心とする南部の２つのまとまりを想定できる。このうち北山通内で実施された４次調査（２－７）では，晩期末長原式の深鉢を用いた甕棺状の遺構とⅠ期の甕形土器が出土している。該期の明確な遺構は今までのところこの調査のみでしか報告されていないほか，６次調査や９次調査（２－12）で散発的な遺物の出土をみているらしいが，実態は不明である。いずれにしろ，この時期の遺跡は４次調査地近辺に限定されるひろがりをもつものと考えたい。弥生中期に関しては，報告されている限りにおいては北部の５次調査（２－８）でⅡ期の土器片が，南部の11次調査（２－13）でⅣ期の土器片がそれぞれ微量出土しているにすぎない。Ⅴ期後半以降になって竪穴住居などの遺構や遺物の検出例が増加し，北部の３次調査（２－５），南部の10次調査および13次調査（２－14）で確認されている。これらの地点ではそれ以後のⅥ期以降の時期の竪穴住居も確認されており，７次調査（２－９・17）および８次調査（２－10）の竪穴住居はこうした時期以降が中心となってⅤ期にさかのぼるものはない。以上のⅤ期後半期の遺跡の広がりを検討すると，まず南部の単位に関しては，８次調査地より東は谷状の後背低地と予想され，水田などの生産域として利用されている可能

性はあるにしろ，集落域の西限と想定したい。南限としては，6次調査では周辺的な様相ながら遺物の出土がみられるものの（2－16），9次調査地や11次調査地の南半でこの時期の包含層や遺構が認められないことから，このあたりに求めたい。北限は，遺跡全体としては3次調査地以北と推定されるものの，それ以外の手がかりは欠いている。遺跡は北西から南東に傾斜する扇状地上に立地していることから，標高80m前後に立地する北東部，70m前後に立地する南西部という2つの集落単位が，等高地に沿って東西に帯状に広がっていたと想定しておきたい。散発的にしろ出土している中期の土器は，この近辺が活動域であったことを示しているが，各地点で石器類の出土もほとんどみない状況であることから，大規模な集落の存在は想定し難いといえよう。

〈C－1群の遺跡〉

3．修学院小学校（沖殿町）遺跡

史38，市256，府23－65

4．一乗寺向畑町遺跡

史39，市257，府23－27

いずれも扇状地上に立地する縄文後期が主体の遺跡であるが，晩期末の土器も微量であるが出土している。Ⅰ期以降の遺物の出土は報告されていない。ただし，一乗寺向畑町遺跡の西南約300mで実施された調査では，下層の褐色砂礫中より摩滅した弥生土器小片の出土が報告されている（4－3）。それ以外の記述がなく詳細は不明であるが，東方の扇状地上からの流れ込みと想定されることより，弥生期の遺跡が向畑町周辺に存在している可能性もある。

〈C－2群の遺跡〉

5．北白川上終町（北白川廃寺下層）遺跡

史40，市265－1，府28－30

6．北白川小倉町別当町遺跡

史42，市265－2，府28－31

縄文前期～後期各期の遺跡として著名であるが，晩期末以降の時期の遺物も出土している。北白川上終町遺跡では，縄文中期末の住居祉発見地点（5－1）を中心とした遺跡範囲よりも東方で，晩期末船橋式土器が出土する包含層が確認されている（5－3・6・8）。泉拓良が上終町遺跡第2地点と呼称しているものに相当し（7－13），地点的には上層の北白川廃寺の推定寺域と重複しているため，上終町遺跡とは区別して「北白川廃寺下層遺跡」との呼称もされている（5－7）。このほか，北辺地点（5－2）や，東方の小倉町別当町遺跡との境界に近い地点（5－4）では弥生土器の出土や包含層が，また土壙状の遺構の確認例もある（5－5）。いずれも時期の記述がないため詳細は不明であるが，一帯に弥生期の遺跡も存在している可能性を示している。一方，小倉町別当町遺跡では，小倉町・別当町双方の地点での戦前における発掘・採集品に晩期末の土器が少量含まれている（6－1・2・4）。また，戦後別当町地内で実施された発掘調査では晩期末以降の河川跡が確認されている（6－3）。上終町・小倉町・別当町一帯は，以上のように晩期末以降の遺物の出土を広域にわたってみる状況にある。縄文期に関してはそれぞれ時期を違えた別遺跡と理解されているが，晩期末～弥生期に関しては資料の増加を待って遺跡範囲を再検討する必要があろう。

7．北白川追分町（京都大学北部構内）遺跡

史80，市265－3・4，269－1，府28－32・68・69

この地一帯は，弥生前期末～中期初頭の一時期に堆積した厚い洪水堆積層に覆われており（第Ⅰ部第4章参照），その上下で地形環境が大きく変化していることから，弥生Ⅰ期以前とⅡ期以後の遺跡を同一条件で考えることはできない。この洪水堆積層直下に認められる黒褐色土層がおおむね縄文晩期～弥生Ⅰ期の遺物包含層であり，谷状地形や流路などで部分的に欠けているほかは，ほぼ北部構内の全域で確認できる。ただし，土器がまとまって出土している地点でみると，北部構内中央付近の高位の地点では晩期末の土器の出土量が多く，これにⅠ期の土器が微量伴うか，あるいは全く伴わないといった状況がみられる（7－3・5・12・14・15・17など）のにたいして，南辺付近ではⅠ期の土器が主体で晩期末の資料は少ない状況であった（7－1）。これらは，基本的には晩期～前期の包含層として水平的ひろがりが把握で

きる黒褐色土層も，地点により微妙な時期差をもつことを予想させる。この問題については各地点の土器の出土状況とその型式学的内容の検討が必要であり，別稿に譲る。なお，構内北辺ではこの層は確認されず（7－16・20），晩期末～Ⅰ期の追分町遺跡のひろがりはここまで及んでいないと考えられる。

洪水堆積層の上面に営まれるⅡ期以降の遺跡は，谷状の起伏が埋積されてほぼ現在に近い地勢のもとにあったと思われるが，資料は少ない。Ⅱ期～Ⅲ期の方形周溝墓や溝の確認（7－7）をみているほかは，（7－16）でⅠ～Ⅴ期の資料が流れ堆積中より微量出土しているのみである。晩期～Ⅰ期の段階は扇状地全面にひろがりをみる追分町遺跡は，Ⅱ期以降西側縁辺部の小規模な遺跡へと変化していると判断される。

8．吉田山西麓遺跡第1地点（京都大学本部構内）

史81・82，市269－2・265－4，府28－42・68・70

層位的な状況は北白川追分町遺跡と同一である。構内西縁の東大路通りに面した地点（8－2）では，高野川系の河川によるとみられる攻撃面が，洪水堆積層とその直下の縄文晩期～弥生前期遺物包含層に相当するとみられる層を削っている状況が確認されている。ただしこの2層は本部構内全域に均等に存在しているのではなく，構内東南隅（8－3）や東北隅（8－4）で確認されているものの，中央付近でははっきりとした確認例はない。扇状地の尾根部分の微高地に相当する本部構内の中央部では，後世に削平を被っている可能性もある。現在までのところ縄文～弥生期を通じて明確な遺構の確認例はないが，（8－3）地点の試掘調査では包含層中にまとまった晩期末～Ⅰ期の土器片の存在が判明している。Ⅱ期以降の遺物も微量であり（8－5～8），いずれも純粋な出土例ではないため遺跡の実態ははっきりしない。このうち（8－5）地点では銅鏃の出土をみている。なお，東側の吉田山山頂付近では太型蛤刃石斧の刃部片が採集されている（8－1）ことから，周知の遺跡範囲として認定されている。前述した本部構内での遺物出土状況からみて，吉田山に近接した地点にさしあたりⅠ期を中心とした集落存在が想定され，「吉田山西麓遺跡第1地点」と呼称しておきたい。

9．吉田山西麓遺跡第2地点（京都大学総合人間学部構内・吉田近衛町）

史83，市269－4・265－4，府28－68・72

層位的な堆積状況はここでも基本的に変化していない。ただし，構内東半では洪水堆積層下の縄文晩期～弥生Ⅰ期の包含層は認められない（9－9）。遺構としては，弥生Ⅰ期の南流する流路と土器が（9－7）地点で検出されており，周辺に水田等の存在が推測されていたが，平成4年度に，南東側隣接でⅠ期の水田遺構が確認されている（9－13）。該期の包含層や流路状遺構は，南西の医学部構内西縁部（10－6）および南方の吉田近衛町地内（9－10）でも確認されている。また北方では（9－11）地点や（9－4）地点で包含層や遺物の出土をみている。このように，縄文晩期～弥生前期の包含層の広がりは総合人間学部構内のみにとどまらず医学部構内の一部や南方の吉田近衛町地内にも及んでおり，前述の本部構内の遺跡（第1地点）とも有意な関連をもつことが予想されることから，これらを「吉田山西麓遺跡第2地点」と呼称しておく。なお，洪水堆積層上面では，弥生中期～古墳期の遺物を含む黒褐色土層の堆積があり，（9－7）地点でこの層を埋土とするⅣ期の溝状遺構と土器の出土をみているほか，（9－2）地点でⅡ期の遺物の出土があるが，遺跡の状況を復元するには至らない。

10．吉田山西麓遺跡第3地点（京都大学医学部・病院構内）

市269－5・6，府28－73・74

ここでは，京都大学吉田キャンパスを中心とする北白川追分町・吉田山西麓第1地点・吉田山西麓第2地点の各遺跡で基本層序として認められてきた弥生前期末～中期初頭の洪水堆積層やその直下の晩期末～前期の遺物包含層は，基本的に存在していない。これは，古代に至るまでこの地が高野川の流れが及ぶ場所であり，地形的条件がかなり異なっていたことによる。しかしながら，縄文後期の土器がまとまって出土する地点もあり（10－8），高野川系あるいは白川系の流路間に介在していた微高地上にも，縄文～弥生人の活動が及んでいたことが判明している。目下のところ，縄文晩期末以降弥生期に関しての包含層や遺構の確認はないが，遺物の出土は頻繁にみられ，とりわけ周辺では希少なⅤ期の遺物がまとまっていることが注目される。晩期末～Ⅰ期に関しては，（10－1・6～8）地点で微量の出土をみているのみであり，多くは東方にある遺跡からの流れ込みとみられる。一方，Ⅱ期～Ⅳ期の遺物は（10－6・10）地点など，北半の医学部構内での出土をみる。土器の中には大型の破片や完形の壺形土器などが含まれており，近接した遺跡の存在をうかがわせる。位置的状況からみて，Ⅳ期の遺構の確認されている東側の第2地点と関連する可能性が高い。また，Ⅴ期の遺物は（10－3・4・7・10）地点で出土している。このうち量

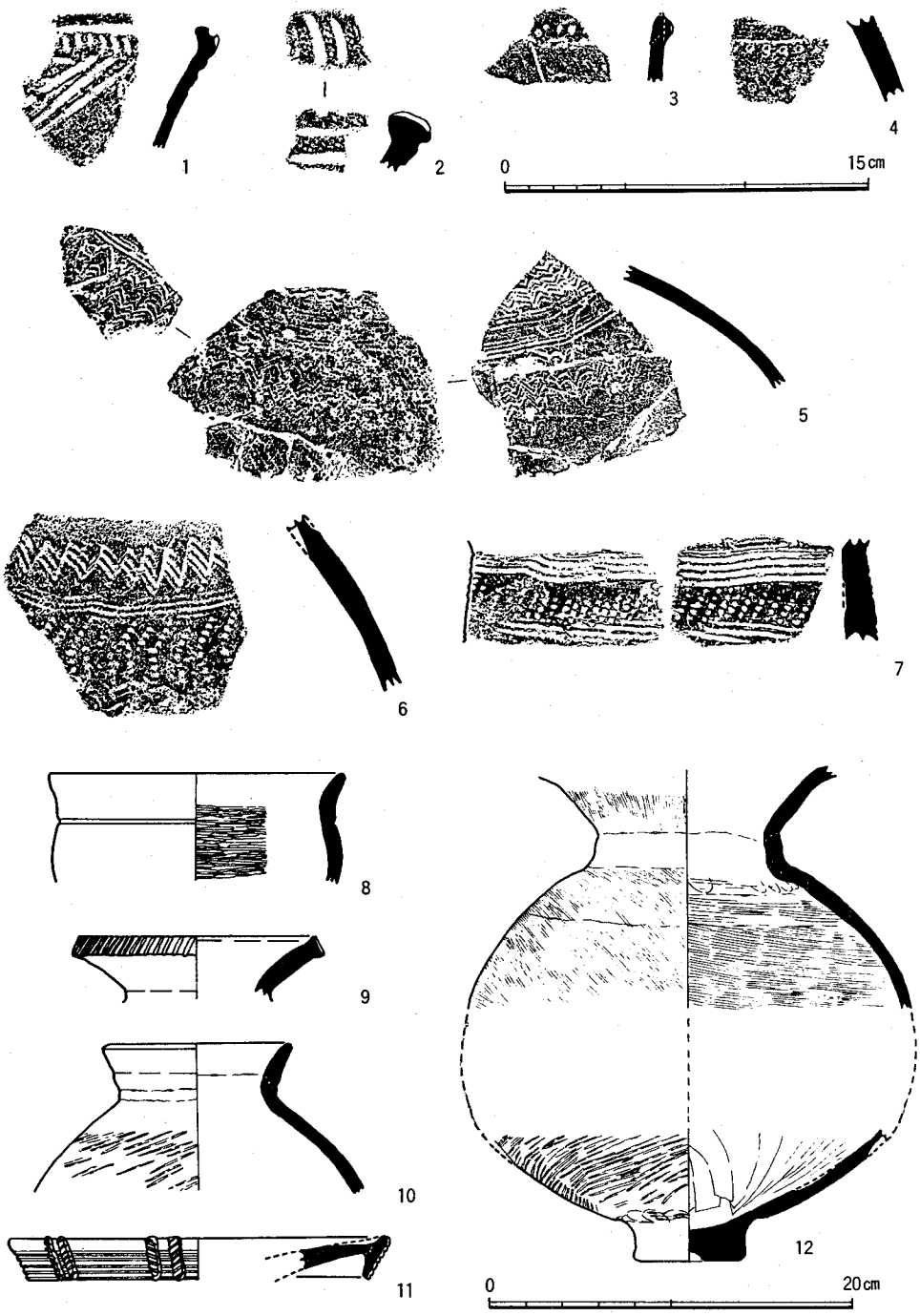

図82　京都大学病院構内 AJ 19区出土土器（1～7縮尺 1/3，8～12縮尺 1/4）

的にまとまった出土は2地点あり，医学部構内の（10－4）地点では，立合調査での出土であるため包含層や遺構の有無は不明であるが，V期後半の大型の土器破片が数点まとまって出土している。病院構内の（10－7）地点の出土遺物は，未報告であるためここに紹介しておく（図82)。いずれもＡＪ19区の出土品で，中世以降の時期の包含層や土取り穴の埋土からの出土である。総量はコンテナ1箱分であり，縄文後期2点（1・2）や晩期末1点（3）Ⅰ期1点（8）のほかは，V期後半に属する遺存度の良いおおぶりの破片が多い。この中で（12）は，胎土中に大粒の砂粒を非常に多く含んでいる点が注意される。出土地点では，弥生～古代遺物包含層の可能性がある黒褐色土層が確認されているものの，砂取り穴により破壊を被りほとんど遺存していなかった。結論は今後の調査を待って下さねばならないが，同様な黒褐色土層は，前述した第2地点における弥生中期～古代遺物包含層（9－7）に対応する可能性が高いと考えられ，本来V期の遺物包含層中に含まれていた土器類が，それを破壊した中世の土取りによって埋土中に混入した可能性を想定しておきたい。状況を復元するには資料不足であるが，II期以降に関しては第2地点と一連のものとなる可能性がある構内の遺跡，V期後半に関しては医学部構内・病院構内それぞれにまとまりのある遺跡の存在を想定しておく。縄文期の病院構内遺跡については東方の聖護院遺跡や南方の岡崎遺跡との関係が想定されているが（10－8），弥生期に関しては，距離的に遠い岡崎遺跡よりも立地条件上からも東方の遺跡との関連が強いと判断し，「吉田山西麓遺跡第3地点」と呼称することにしたい。なお，ＡＪ19区の出土資料は五十川伸矢氏に提供していただいた。厚く御礼申し上げる。

11．岡崎遺跡

史84，市274，府28－41

吉田山南側の広大な範囲を占める遺跡であり，特に近年広面積の調査が相次いでその内容が明瞭になりつつある。晩期末～Ⅰ期にかけては，土器の出土はみているようであるが報告例はない。中期に関しては，II期の方形周溝墓2基とIV基の方形周溝墓2基が隣接して確認されている（11－5・7・8）ほか，IV期以降の土器や石包丁などを含む土坑の報告がある（11－20)。これら以外には該期の遺構・包含層の報告例はなく，太型蛤刃石斧の出土（11－1）や若干の石器類の出土が散発的にみられるにすぎない。現状では遺跡北西部付近に限定されたひろがりであったと想定さざるを得ない。全域に遺跡が拡大するのはV期後半以降であり，古墳期にも継続する。これまでのところ，北東から南西方向への大規模な流路状遺構が。西部（11－9・11)，中央部（11－2・15)，東部（11－4・13）のそれぞれで確認されている。東部の流路は，動物園北端部では確認できていないことから（11－22)，動物園内を西流して美術館付近で中央のものに合流するようである。これらは，白川系の一連の流路と思われ，多量の土器や木器類も出土している。このうち，最も規模が大きく実態も良くわかっているものは中央部の（11－15）で確認されたもので，縄文早期以降に形成がはじまり平安期まで湿地帯として姿をとどめていた状況が判明しているほか，堰や貯木施設状の遺構の存在も報告されている。流路以外では，西部で尾根状の微高地上に並列するV期～VI期の方形周溝墓群が確認されており（11－16・17・23)，一方東部ではV期後半の土器をまとまって出土する土壙が確認されている（11－10)。遺跡はさらに東へも広がっているようであり，(11－12）地点では包含層の確認こそ無いものの多くの土器の出土をみている。以上の一連の成果からV期後半の岡崎遺跡の姿を復元すると，南西流する複数の流路を取り込んだ形でその中の微高地上を居住域や墓域として利用していたものと推測される。住居の発見がないため居住域については決め手を欠くが，遺構・遺物の出土状況や地形的条件から考えて，西部に墓域をもち，中央の大流路付近より東側，それも，より高位の北東部一帯を中心に居住域の存在を仮定しておきたい。

〈D群の遺跡〉

12．芝町遺跡

史46・88，市521，府29－2

名神高速道路建設にともない1958年に予備調査が行われたとされるが（12－1)，結果の報告はなく，地点等の詳細は不明である。その後分布調査によっても遺物の採集はされているが，縄文～弥生期のものかどうかは不明である（12－2)。「史」および「市」の記載によれば，縄文晩期土器は確実に出土しているようである。このほか，有孔磨製石斧の出土もあることから，弥生期の遺跡が存在する可能性もある（ただし，『京都市遺跡地図』1974年版では，有孔磨製石鏃と記載されており，出土遺物の内容に混乱がある)。

13．旭山遺跡

史89，市515，府28－16

77～78年に実施された旭山古墳群の発掘調査に際して，表土や古墳の封土内中から多くの土器・石器類が出土した（13－1）。土器は風化が著しく細別時期の判定は難しいが，凹線文をもつものは1点もみられないようであり，中期中葉頃の一時期にまとまるものと考えたい。石器では，サヌカイト製の石槍が出土していることが注目される。こうした遺物は，古墳群のうちでも最南のE支群のひろがりと対応して出土すると報告されており，旧安祥寺川東に望む丘陵上に小規模な遺跡の存在を想定できる。立地上特異であり，いわゆる高地性集落として，ふもとにある山科川水系の諸遺跡とも関連をもっていた可能性が高い。

14．左義長町（山科本願寺跡下層）遺跡

市519，府29－34

1984年に実施された立合調査で，V期～VI期の遺物出土と竪穴住居・土壙や流路などの遺構が確認されている（14－2）。立地的には山科川西岸の自然堤防上の微高地にあり，遺跡は更に北へ広がる可能性も指摘されている。近隣の山科川河川敷の調査でもV期の土器が出土している（14－1）。こうした成果からみて，V期後半以降には，中世の山科本願寺跡と位置的に重複するように中臣遺跡の北方一帯にも遺跡が広がっていたことがわかる。

15．中臣遺跡

史48・90，市525，府35－7

旧安祥寺川と山科川とにはさまれた段丘上を中心に，縄文中期末葉以来の活動の地となっている。20年以上におよぶ調査が数十次にわたって今なお継続中であり，遺跡の内容もかなり明らかになりつつある。ただし，情報量が莫大となり，出土遺物も含めた詳細な検討はかなりの稿数を必要とするため別項に譲り，ここでは概略を記すにとどめたい。

縄文晩期～弥生中期前葉のII期あたりまでの遺跡の中心は，北東部の山科川沿いに求められる。23次（15－16a）・40次（15－17）・51次（15－29）の各調査ではこうした時期の遺構が密集しており，遺物量も多い。遺構は晩期末の埋甕をはじめ，I～II期も土器棺や方形周溝墓がある。また，その南方の21次（15－15a）・25次（15－15b）・42次（15－18）の各調査でも該期の遺構や包含層が確認されている。目下のところ住居跡の確認はないため集落域を特定できないが，この一帯に近接するものとみてよかろう。なお，晩期末の土器棺は西側の旧安祥寺川沿いの52次調査（15－21・30）でも検出されているが，密集度は低く，土器量も少ない。また，II期の方形周溝墓や土壙は，北西部の段丘上の1次（15－1）・27次（15－16b）・64次（15－24・39）の各調査で報告されており，ここにはII期を中心とした墓域を想定できる。従って，II期の段階では，北東部の墓域とあわせて2つの単位が認められることになる。III～IV期については，遺物の出土は散発的であり，状況がはっきりしない。南端の67次調査（15－25・41）で該期の土器が出土したとされているが，内容は不明である。V期以降は，ほぼ遺跡範囲の全域で展開をみる。ただし，旧安祥寺川沿いの45次調査（15－20・27）周辺は各期の遺構の空白地帯であり，湿地状の状況が確認されている。あるいは水田などの生産域となる可能性があろう。京都盆地の他の遺跡では希少なV期前葉に位置づけられる住居が52次調査（15－21・30）で検出されているものの，住居跡の大半はV期後半以降になる。これらの時期を追っての展開過程や集落単位などは，各住居跡の出土遺物に不明な点が多いため，今後の課題としたい。墓域としては，段丘上北西部の27次調査（15－16b），その南東の38次調査（15－19）と61次調査（15－24・38），旧安祥寺川沿いの低地の15次調査（15－14）の3箇所で方形周溝墓が確認されている。この3つの単位がV期の集落単位に関係しているとみてよいだろう。なお，北西部にやや離れた，70－2次調査でV期の円形住居も確認されている（40－43）。これに東接する70－3次調査地点（15－44）付近に旧安祥寺川旧流路の東岸が存在し，遺跡の東限と予想される。

16．大宅（大宅廃寺下層）遺跡

市528，府35－40

大宅廃寺に重複する。縄文～弥生期の遺構は段丘上の高地に広がることがわかっている（16－2）。縄文中期末からの墓域であり，晩期末の土坑3基のうちには，棺に用いたと推定される深鉢をともなうものもある。弥生期では，I期の土坑8基と時期不明のもの1基が報告されており，I期の土器各種と微量のII期の土器，石鏃や太型蛤刃石斧などが出土している。近接する中臣遺跡と同様に，晩期末～弥生I期頃までの墓域や墓制は縄文期以来のあり方を踏襲していることが注意される。隣接する谷からは該期の遺

構・遺物の顕著な出土をみていないことから，居住域は同一段丘上のさらに高地か隣接する尾根上の高地にあるものと推定される。

17．勧修寺旧境内遺跡

市532，府35－40

中臣遺跡の南約1㎞の山科川西岸に位置する。推定旧勧修寺境内東限付近で昭和62年度に実施された発掘調査で，弥生後期のピット状落ち込みが検出されているが，それ以上の情報はない。遺物は縄文中・後期のものも出土しているとされ，中臣遺跡と同様な縄文期以来の複合遺跡が，山科川西岸の微高地沿いにさらに存在していることを示すものであろう。

18．小栗栖遺跡

史95，市948，府35－28

山科川を南に望む丘陵斜面上に，弥生後期土器の散布が知られている。発掘調査は行われておらず，土器の内容も不明なため，遺跡の実態は明らかではない。ただし，山科盆地と西方を結ぶルート上にあり，周辺に遺跡の存在が知られていない空白地帯にあることから，重要度は高い。

〈E－1群の遺跡〉

19．轆轤町遺跡

史85

平安後期以降の六波羅に重なる。V期の土器が出土し，包含層が確認されているとされるが，報告例はなく詳細は不明である。呈示された器台形土器は，V期後半以降のものと思われる。

20．南日吉町遺跡

史86，市433，府28－10

丘陵斜面より弥生土器が採集されているが，発見時の状況は不明である（20－1）。採集されている土器片は叩き目をもつものもあるが，弥生土器か土師器か判別し難いものもある。V期後半以降の遺跡であろう。都出比呂志は高地性集落として位置づけている（20－2）。

21．月輪遺跡

史87，市429，府34－15

発掘調査では流れ堆積中よりV期の土器が出土し，東方の上流部に集落の存在が推定されているが，報告はなく詳細は不明である。なお，中期の土器と太型蛤刃石斧の出土遺跡としても認識されており，『京都市遺跡地図』1974年版および1985年版ではそう記述されている。あるいは，出土遺物の内容に混乱が生じている可能性がある。

22．稲荷山西麓（法性寺跡・正覚寺跡下層）遺跡

深草遺跡の北方約1㎞にある。昭和62年度に実施された広域立合調査によって，数カ所で弥生土器を含む包含層が確認された。地点のうち最も北では，鴨川の東岸にほど近い稲荷下高松町地内で，疎水をはさんだ東西両側でIII期新相の土器と包含層や流路が確認されている（22－1a）。その南西約350mの深草正覚寺町地内では，中央部20mの範囲に限定できる状況で暗紫色の泥土層があり，III期の土器が出土している（22－1b）。泥土層の断面では溝状や土坑状の落ち込みも観察されている。さらにこの南方約300mの深草開土町稲荷小学校北側では，II～III期の土器を包含する泥土層が確認されており（22－1c），最南の深草祓川町地内では，層位的状況は未確認ながらもV期の遺物が採集されている（22－1d）。東方の稲荷山から西流する小河川が形成した扇状地上に中期以降の各時期の遺跡が点在している状況がみてとれるが，いまだ明らかでない点も多く，狭小な範囲に群在するこれらをここでは「稲荷山西麓遺跡」として一括しておく。この南方に位置する深草遺跡との関連が想定されるが，II期を中心とする深草遺跡とは時期的な補完関係にあることが注意される。

23．深草遺跡

史91，市918，府34－12

京都市域では最も古くより弥生期の遺跡として知られていた。昭和30年代に，西浦町一帯で発掘が重ねられ，II期を中心とする多量の土器と木器・石器類各種が出土した（23－1～5）。昭和41年の京都府教育委員会の調査では南北方向の溝状の湿地が検出され，同様な遺物が出土しているが，この際の出土土器はV期のものも微量含んでいる（23－8・10）。なお，その後周辺で（財）京都市埋蔵文化財研究所が実

施した広域立合調査で，この溝状湿地は馬蹄形にめぐるものであることが判明するとともに，より東や北へも遺跡が広がることが判明しているという。周辺部では，遺跡の北東辺付近でも湿地状堆積が認められ（23－16），また南東辺付近でも時期不明ながら弥生期の遺構存在が報告されている（23－15）。一方南西辺付近では顕著な包含層や遺物の出土はみられず，近世には河川であったとも推測されている（23－12・14）。こうした知見を総合すると，遺跡は稲荷山西麓に南北に帯状に広がっていることが予測され，発見されている湿地帯は水田などの生産域にあたり，居住域はより東方の段丘近辺の高地にあるものと推定しておきたい。

24．谷口町遺跡

史50，市937，府35－19

山麓での土取り中に晩期末長原式の土器片が採集されているもので，包含層は未発見である（24－1）。東山丘陵沿いに該期の遺跡が存在する状況の一端を示すものであろう。なお，「市」「府」ともに，谷口町よりも東方の馬谷町遺跡において晩期土器が採集されたとの記載されるが，採集者の報文に基づくかぎりこれは谷口町遺跡との混同と思われる。

〈E－2群の遺跡〉

25．伏見城下町下層（桃山弾正町）遺跡

宇治川の北岸，桃山丘陵から南西へ張り出す段丘上の突端付近で，昭和63年度の発掘調査の際，II期の方形周溝墓7基が検出されている（25－1）。遺跡としては近世の伏見城下町遺跡の範囲内になる。これまで周辺で弥生期の遺跡は全く確認されていなかったが，調査事例に乏しい桃山丘陵上にも展開している可能性を示唆するものである。

〈E－3群の遺跡〉

26．鳥羽（離宮下層）遺跡

史92，市956－2，府34－63

鳥羽離宮跡と重複する。離宮跡の範囲のうち，弥生期の鳥羽遺跡は北半と南半に2大別され，このうち北半は，東部の東殿比定地周辺と西部の田中殿・金剛心院比定地周辺に集中して遺構・遺物の出土をみている。立地上は，鴨川南岸の沖積低地における自然堤防上に，こうした弥生期の活動拠点があるといえる。なお，100次調査までの概略は（26－24）にまとめられているが，その後も新たな知見が多く得られている。出土遺物を含めた詳細な追跡調査はまだ果たしていないため，主要な成果が得られている報文にもとづいて，遺跡のおおよその姿をあとづけておきたい。

縄文土器は各地点で散発的に出土しているが，遺構が見つかっているのは，北半西部の102次調査での晩期の土坑（26－18）と119次調査の時期不明の土坑がある（26－8）。I～II期に関しては，遺物の出土は微量みているようであるが，包含層や遺構の確認はなく，III～IV期が遺跡の中心となる。北半東部では71次調査（26－11）と84次調査（26－12）で溝や土坑などの遺構が集中して見つかっており，土器の出土量も多い。北半西部では90次調査（26－14）と93次調査（26－15・16）で同様な状況を呈している。これらの地点では，未製品も含め打製・磨製の各種石器類の出土も豊富であり，東西それぞれの集落域に相当しているものとみたい。V期以降になると再び遺物の出土が少なくなるようであり，明確なものは前述の90次・93次調査地点で土器の出土が報告されているにとどまる。なお，広域立合調査では田中殿の東側で旧流路が確認され，周辺で中期および末期の遺物出土が報告されている（26－23）。南部に関しては調査例が少なく，中島堀端町地内で実施された立合調査で弥生土器を包含する流路状堆積が確認されているにとどまり（26－22），状況に不明な点が多い。こうした成果をまとめると，晩期の段階で北半西部で小規模な集落が営まれた後，空白を経てIII～IV期に東西2つの微高地上の居住域を中心に活発な活動が展開される。こうした活動はV期にはいると再び衰退するとみられる。南部の遺跡がこうした動きにいかに対応しているかは，現状では不明と言わざるを得ない。弥生中期後半が主体となるという点で，南方にある下鳥羽遺跡，東方の深草遺跡や中臣遺跡の動向とは時期的な補完関係にあるようにも思われ，こうした観点での追究も今後の課題となろう。

27．下鳥羽（芹川）遺跡

史93，市957，府34－38

鳥羽遺跡の南約1㎞に位置し，後背低地内の自然堤防上という立地条件はほぼ同じくする。昭和62年度に実施された調査で，土坑などからⅠ期前半期に位置づけられる土器がまとまって得られているほか，中期の方形周溝墓状の遺構と竪穴住居跡，Ⅴ期以降の時期の竪穴住居跡が検出されている（27－3・4）。近接した地点で実施された昭和63年度の立合調査でⅠ期およびⅢ～Ⅳ期の遺物包含層が（27－5），平成5年度の立合調査でⅠ期・Ⅴ期を中心とする包含層とまとまった遺物が（27－6）それぞれ出土しており，登録遺跡範囲のうちでも西半部の鴨川に近い地点で弥生期を通じた大集落が存在する可能性が高い。遺跡の東部ではⅥ期以降が中心となり，湿地状堆積がみられるのみである（27－2）。調査地点が少ないため遺跡の全貌は不明な点が多いものの，京都盆地における弥生文化の導入と展開を考える上で鍵となる重要な遺跡といえよう。

〈F－1群の遺跡〉

28．柳池中学校（烏丸御池）遺跡

史60

Ⅴ期以降の南西流する溝や土器の出土が知られている。中学校地点での調査の詳細は未報告のため明らかでないが，南西に位置する昭和63年度の調査地点では，地山上から遺存度の良い弥生土器片の出土が報告されており（28－1），また平成元年度にはⅤ期末の竪穴住居も確認されている（28－2）。この地点は，遺跡としては烏丸御池遺跡として古墳時代以降の遺跡として登録される範囲内になるけれども，御池通周辺以北にⅤ期以降の遺跡の中心が存在することが想定される。

29．高倉宮下層遺跡

京都文化財団の調査により晩期末～Ⅰ期の遺物がまとまって出土したことにより，その存在が知られた（29－3・4）。従来よりその周辺地域での調査で縄文～弥生期の遺物が出土することは知られていたが（29－1・2），まとまった成果は得られていなかった。該期の遺物は近年の近接地での調査でも流路状の堆積から出土を見ているが（29－5），時期的に単純でまとまった出土は（29－3）での報告に限られる。ここでは東北から南西方向の谷状地形の肩部に遺物の集中がみられ，居住域から至近の位置との推測がされている。しかしながら，晩期末～Ⅰ期の単純な遺物出土は近接地点にはみられないため，この地周辺の限られた範囲に該期の集落存在が推定されるとともに，南西方向に位置する烏丸綾小路遺跡と時期的補完関係にあることが注意される。

30．烏丸綾小路（長刀鉾町）遺跡

史64，市606，府28－2

四条烏丸交差点周辺から南西にかけて広大な範囲が遺跡として登録されている。たび重なる調査の結果晩期末以降の各時期の遺物が出土しており，京都盆地の弥生期の遺跡の中では拠点的な大遺跡と目されている。ここでは成果の得られている調査地点を追跡して時期毎の推移をあとづけておきたい。なお，古代学協会の調査地点名をとって「長刀鉾町遺跡」との呼称もあるが（30－9），遺跡はその地点にとどまらないため，ここでは登録遺跡名の「烏丸綾小路遺跡」を採用する。

晩期末～Ⅰ期の資料は，まとまったものはなく，いずれも流れ堆積か後世への混入である。北端の（30－6・24）では晩期末以降の土器が流れ堆積中より出土しているが，これは北側の高倉宮下層遺跡などとの関連で考えるべき資料といえる。このほか，遺跡中央付近の烏丸線調査№6トレンチ（30－1・2）で晩期末船橋式の土器片と石包丁が，西南辺の（30－13）では南西流する溝からⅡ～Ⅲ期の土器を中心とする中でⅠ期のものが若干量，（30－11）ではこの溝の延長とも推測される流路からⅠ～Ⅴ期の土器が混在して出土している。一方，中期以降の遺構・遺物の密度が濃い地点はこれとはわずかに場所を違えており，四条烏丸周辺が中心となる。状況が詳細に報告されている（30－9）では，Ⅱ期以降の溝・土坑と包含層中から豊富な土器・石器類の出土を見ている。また，近接して，Ⅳ期の線刻絵画土器が出土した（30－20）や湿地状の包含層が確認された（30－19），流路状の堆積より該期の遺存度の良い土器類が出土した（30－15），溝や土坑の確認された（30－23）などの調査例がある。さらにⅡ～Ⅴ期の遺物の出土した（30－25）では，Ⅲ期末～Ⅳ期の南北方向のⅤ字溝が確認され，該期の集落西限の環濠と推測されている。ただし，さらに西の（30－18）でもⅣ期の土坑と土器の出土をみており，報告者は別遺跡とする可能性も

指摘しているが，烏丸綾小路遺跡内の活動域のひろがりと考えておきたい。また，南方の成徳中学校内の調査でⅣ期の方形周溝墓が確認されているらしいが（第６回調査成果交流会資料），詳細は一切不明である。そして，前述した西南域での（30－11・13）の南西流する流路内からの出土がある。Ⅴ期以降は，それまでと同じ四条烏丸周辺とともに（30－９），それよりもわずかに南へ移った烏丸綾小路周辺でも遺構・遺物の密度が増す。烏丸線調査№80トレンチではⅤ期末頃の住居２軒が確認され（30－７），近接する№６トレンチ（30－１・２），№47トレンチ（30－3a）や№48トレンチ（30－3b），立合18地点（30－3c）でも，該期の遺構・包含層とまとまった遺物の出土をみている。この時期には遺跡は東へも広がっており，（30－17）でもⅤ期の包含層とまとまった遺物の出土が報告されている。また，南方の（30－21・27～29）でもⅤ期の流路や微量の遺物の確認をみるが，磨滅しているものが多い。

以上をまとめると，晩期末～Ⅰ期には，遺跡範囲内の微高地上に小規模な数単位で活動域が散在していたものと思われる。Ⅱ期以降，四条烏丸周辺の南へ張り出す微高地上の平坦地が活動拠点となったと思われ，とりわけ四条烏丸周辺の一帯がその中心となったと想定される。これに対してⅤ期以降は，前半期の様相が不明瞭だが，後半期以降Ⅵ期にかけて，四条通り周辺以南の烏丸綾小路一帯へと居住域の中心が南遷したとみられ，遺跡の範囲も東や南へやや拡大している様子がうかがえる。これらには複数の単位が存在している可能性があるが，現状では復元する手だてを欠いている。

31．松原中学校遺跡

史63

1978年の調査で弥生中期の遺物包含層と土器の出土をみたとされるが，詳細は不明である。

32．中堂寺南町（坊城町）遺跡

史28・421

右京六条一坊の下層に相当する。本来は平安期の遺跡として認識されていたものであるが，近年の発掘調査で，包含層の確認こそ無いものの，近隣に遺跡の存在をうかがわせる状況で縄文～弥生期の土器・石器類各種の出土をみている（32－２）。調査地内では南北に湿地状堆積が確認されており，北湿地はⅤ期以降，南湿地は縄文期にさかのぼる形成であると報告されている。同様の湿地や流路は西接する地点でも確認されている（32－３～５）。土器は晩期末～Ⅰ期とⅣ期以降にほぼまとまる内容である。今後の周辺での調査に注意を払う必要があろう。なお，北西隣接地での山陰線高架建設工事にともなう調査でも，晩期末の土器片の出土が報告されており（32－１），坊城町遺跡と呼称されているが，この遺跡に関連するものとみたい。

33．島原（堂ノ口町）遺跡

市609，府27－５

本来は古墳～奈良期の堂ノ口町遺跡として，京都市中央卸売市場構内を中心に登録されている。弥生期の遺跡はこれより東側の島原地内に存在すると想定され，昭和54年度の試掘調査で縄文土器と弥生後期～古墳時代の土器を含む層が確認されている（33－１）。よって，ここでは「島原遺跡」と呼称することにしたい。なお，市場内の調査でも縄文～弥生土器の出土は報告されているものの，包含層は未確認である（33－２）。

34．衣田町（西市下層・西七条市部町）遺跡

史29・65，市607，府27－３

平安期の西市跡と重複する。縄文期の遺跡としては遺物の出土地点から西七条市部町遺跡との呼び名もある。1980年に七条中学校内で実施された発掘調査で，方形周溝墓２基と土器・磨製石鏃の出土をみている。調査の詳細は不明だが，周辺に該期の集落が存在することは確実であろう。これより西方約300ｍの市部町地内における立合調査では，時期不明の弥生期の溝と晩期末の土器の出土が報告されている（34－２）。また，これより南方の石井町地内の発掘調査地点では，Ⅴ期～古墳期にかけての厚い包含層と土器の出土をみている（34－３・４）。これより西の南衣田町地内での立合調査では，包含層は明確ではないが，弥生土器の出土が報告されている（34－１）。以上より，遺跡はおおむね西大路通り以東を中心とし，晩期末の遺跡が市部町地内に，Ⅴ期以降の遺跡がそこもふくめて七条通り以南にまで広がっているものと想定する。

35．東塩小路町遺跡

史67

京都駅北側の塩小路通り一帯では数多くの調査が実施されており，弥生期遺物の出土をみている地点も多い。これらは，おおむね烏丸通り以西から堀川通り近辺までの範囲におよぶようであり，扇状地の末端に沿うように東西に広がりをみせる。現状では遺構や包含層の確認をみていないが，京都駅前の（35－1）でII～III期の土器，その西方約400ｍの（35－2）でIV期の土器の出土が報告されている。このほか，時期などの詳細は不明だが，（35－3）および（35－4）でも弥生～古墳期の遺物出土が報じられている。また，北西に位置する竜谷大学大宮学舎構内でも弥生中期土器が出土したとされ，大工町遺跡との呼称もされているが（史66），詳細が不明なため取り上げていない。ここでは塩小路通り周辺一帯に中期の遺跡が存在する可能性を，とりあえず想定しておく。

36．烏丸町（東九条西山王町）遺跡

史30，市659，府34－14

京都駅の南東側一帯が遺跡範囲として登録されている。縄文期の遺物出土から「東九条西山王町遺跡」と呼称される地点もこれにふくまれる。この縄文期の遺物としては，東九条西山王町地内の調査で晩期末船橋式の土器片が（36－1），その南方の烏丸線南進工事№89・№90トレンチでも該期の土器片が出土している（36－3a）。いずれも遺存状況は良好であり，近接した遺跡の存在が推定される。これ以外の成果としては，烏丸線南進工事立合28地点でV期末の南西流する溝が（36－3b），昭和58年度の調査で弥生～古墳期の遺物と太型蛤刃石斧（36－2），昭和59年度の立合調査で包含層（36－4），昭和60年度の立合調査で土坑（36－5），平成5年度の立合調査でも遺構状のものが確認されている（36－7）。以上によると，遺跡範囲でも北半に晩期末の，また東南部の九条河原町周辺一帯に，V期以降の遺構・遺物の密度が濃いようである。西へややはずれた（36－6・8）では，摩滅した弥生土器片が確認されているのみである。蛇行して南流していた鴨川東岸の微高地上を中心に，地点を違えて晩期末とV期以降を中心とした活動域があったものと想定しておきたい。なお，より東方の東九条河西町地内でII～III期の土坑・溝が確認されている（第6回調査成果交流会資料）らしいが，詳細は不明である。

37．東寺町

史69

1982年に実施された立合調査でV期の土坑と土器の出土が確認されているらしいが，詳細は不明である。周辺では，地山の砂礫層をたち割りした際にV期末の土器の出土をみている（37－1）。

38．唐橋遺跡

史68，市656，府27－9

京都駅の南西域一帯に登録されており，平安時代の西寺跡とも重複する。弥生期の遺跡はそのうちの北部を中心とするようであり，八条中学校内での調査では，昭和53年にII～III期の溝・土坑が確認されているらしいが，詳細は不明である。このほか，昭和63年度の調査では流路や溝が確認され，II期を中心としながらV期までと，微量の晩期末の土器の出土をみている（38－6）。また，この北域で実施された立合調査でも中期の土坑や土器の出土が報告されている（38－5）。これより南方の西寺周辺ではV期以降古墳期が中心となるようであり，（38－3）でV期の流路と土器の出土をみている。遺跡の西域では弥生期の包含層やまとまった遺物はみておらず，（38－1）の調査で古墳中期の竪穴住居が見つかっているほか，（38－4）でI期の土器を最下層にみる流路が，（38－2）ではVI期の土器が見つかっているにとどまる。以上より，北部の微高地上を中心に中期前半期の遺跡が存在し，V期以降はそれが南へひろがっている状況を想定したい。

〈F－2群の遺跡〉

39．相国寺門前町遺跡

地下鉄烏丸線調査№1・№31トレンチでは，弥生前期に比定できる土器片とその時期の包含層となる可能性のある層が報告されている（39－2）。周辺での調査がないためこれ以上の復元は不可能だが，近接してI期の遺跡が存在するものとみたい。なお，東南方にやや離れているが，同志社女子大学構内でも，中期以前となる可能性のある土器片の出土報告がある（39－1）。

40．内膳町遺跡

史22・56，市173，府28－14

北白川追分町遺跡とともに，晩期末～Ⅰ期の資料がまとまって出土している盆地内の数少ない遺跡のひとつとして知られる。該期の遺物包含層は黒褐色粘質土層であり，（40－1・2）での調査ではほぼ全域で確認され，Ⅰ期中～新段階に比定できる土器や石包丁をはじめとする石器類が出土している。この東側の（40－7）での調査では，包含層の遺存は良好ではなかったものの，該期の遺構として，炉跡の可能性のあるものを含め2基の土坑が検出され，多くの土器・石器類の出土をみている。包含層そのものはさらに広がりをみせるようであり，南方の（40－4・6）および西方の（40－9）でも確認されているが，遺物の出土は微量である。なお，東方の烏丸線調査№13トレンチでは，これと同一の包含層となるかどうかは定かでないが，晩期末の深鉢とⅠ期の土器類が混在して出土している（40－3・5）。以上の成果からみて，遺跡はⅠ期後半を主体として（40－7）地点周辺を中心としたものと想定されるが，晩期末の遺跡がこれとどう関係するかが，今後の課題となろう。

41．藁屋町（二条城町・七丁目・高陽院下層）遺跡

史25・57・59，市176，府27－15

内膳町遺跡の西南約1kmに位置する。遺跡名は，堀川丸太町北東の藁屋町地内での調査で，Ⅳ期の柱穴や炉跡とまとまった土器類の出土をみている（41－2・3）ことに由来する。このほか周辺では，二条城内の調査で晩期末の土器を出土する流路が（41－4），堀川丸太町下る七丁目地内で石包丁とⅠ期の土器を出土する流路が（41－1），その北側で高陽院園池の下層からⅠ期以降の土器を出土する流路が（41－8・10），堀川丸太町交差点東側の地点でも縄文晩期～弥生前期の流路が（41－5），それぞれ確認されている。これらの地点名をそれぞれの遺跡名に冠する呼称もあるが，ここでは一連のものととらえ，「藁屋町遺跡」として一括する。こうした地点を結ぶと，縄文晩期～Ⅰ期において，現在の堀川通りをはさんで北東から南西方向の流路の存在が推定できる。また，堀川通りの北側の地点での調査では，Ⅴ期～Ⅵ期の土器の出土をみている（41－6・9）。以上をまとめると，遺跡はⅣ期を中心として藁屋町地内の微高地上に存在しているのが確実なほか，晩期末～Ⅰ期およびⅤ期後半頃の遺跡もその東側の流路周辺に存在している可能性があるとみられる。

42．烏丸丸太町遺跡

周知の遺跡ではなかったが，近年烏丸丸太町交差点南西で実施された発掘調査で，Ⅴ期以降の遺構・遺物が出土した（42－1）。遺跡の主体はそれよりあとのⅥ期になるようであり，竪穴住居から一括資料が得られている。地名をとって，「烏丸丸太町遺跡」と呼称しておきたい。

43．豊楽殿跡下層遺跡

豊楽殿基壇の下層に，弥生時代末期の竪穴住居2棟が存在することが報告されている（43－1・2）。それ以外の報告はないため，詳細は一切不明である。

44．上巴町遺跡

史61

藁屋町遺跡の南約600mに位置する。発掘調査では，Ⅲ期の溝状遺構とまとまった土器の出土をみている（44－2）。これ以外に周辺での調査報告がないため，遺跡の広がりを検討する情報に欠けるが，北方の藁屋町遺跡と時期的に補完関係にあることが注意される。なお，西方の神泉苑内でも弥生土器の底部が採集されている（44－1）。

45．壬生遺跡

市308，府27－4

二条駅周辺から南西方向に帯状に広く遺跡として登録されているが，弥生期に関して成果が得られているのは，北辺一帯のみである。駅西側の（45－2）では，北東～南西方向のⅣ期の溝が確認されている。また，駅東側の調査では，流路内の堆積層からの出土であるが，晩期土器および弥生土器の出土が報告されている（45－1）。

46．西ノ京勧学院町

壬生遺跡の東にある。弥生期の遺跡として登録されてはいないが，昭和58年度に実施された調査で，太型蛤刃石斧とⅤ期の土器片が出土し，近隣での遺跡存在が推定されている（46－1・2）。周辺の諸遺跡が中期を主体としている中で，時期的な補完関係をもつものとして注意される。

47．壬生車庫跡遺跡

史62

中京区壬生坊城町の，市電壬生車庫跡地にある。包含層や遺構の確認はないが，後世の遺構からⅣ期～Ⅴ期の土器片が出土している（47－1）。いずれも摩滅を受けない大型破片であって，近接した遺跡存在が推定される。なお，底部に木葉痕をもつものも出土していると報告されていることから，中期前葉期の遺物も出土している可能性もある。

48．西院遺跡

史76，市783，府27－63

阪急西院駅の南側一帯に位置する。「史」では西院月双町遺跡として東方の西京極遺跡とひとくくりにしているが，立地条件が異なるため，ここでは別遺跡と考えておく。昭和57年度に西大路通り西側で実施された立合調査では，竪穴住居の可能性もあるⅡ期の土器包含層が確認されている（48－1）。ただし，報文で呈示されている土器片のうちには明らかにⅠ期とすべきものも含まれるようである。また平成2年度の調査でも石鏃と弥生土器小片の出土をみている（48－2）。

49．壬生東高田町（京都市立病院構内）遺跡

西院遺跡の東に位置する。周知の遺跡として登録されていないが，昭和63年度の京都市立病院構内の調査で北西から南東方向のⅤ字溝とⅤ期～古墳期の土器，その周辺から直線刃半月形の石包丁の出土が報告されている（49－1）。ここでは地名をとって，「壬生東高田町遺跡」と仮称しておく。

50．西京極（西院月双町）遺跡

史76，市784，府27－14

西院遺跡の東に位置する。遺跡は後背低地内の微高地上に立地しており，広域立合調査では，五条通りと阪急京都線の交差地付近を中心に，Ⅴ期の溝や包含層が確認され，遺存度の良い土器が出土している（50－2）。さらに，昭和54年度の立合調査では，同地でⅡ～Ⅲ期の溝や土器類の出土もみているほか（50－3），Ⅳ期の竪穴住居1棟，Ⅴ期前半のそれ4棟が確認されている（50－7）。また，これより北方の地点ではⅤ期の遺構と微量の遺物出土をみている（50－1・6）。一方，西方の西京極地内では，歴史時代以降のベースとなる礫層内から，弥生～古墳期の土器出土が報告されている（50－5・8）。こうした状況に鑑みると，弥生中期～後期の遺跡は（50－2・3・7）地点を中心に存在し，後期以降はこれに加えてさらに南北方向にもひろがりをみせるものと想定できる。

〈G－1群の遺跡〉

51．梅ケ畑銅鐸出土地

史73，市744，府26－15

梅ケ畑向ノ地町地内にあり，標高約130 mの御堂ケ池の北側丘陵斜面で，1963年に宅地造成工事中，2個ずつ入れ子になった銅鐸4個が発見された（51－1）。いずれも外縁付鈕式であることより，弥生中期段階のものとみたい。発見地の北側の谷を流れる奥殿川は，そのまま御室川となって京都盆地に注ぐ。盆地への入り口付近にある常盤東ノ町遺跡で中期の土器が出土しており，銅鐸との時期的関係が注意される。

52．常盤東ノ町遺跡

史74，市764，府27－60

1976年に実施された常盤東ノ町古墳群の調査時に，古墳封土中に摩滅の少ない弥生土器片が多く含まれていることが確認された（52－1）。土器は，Ⅳ期を中心にⅡ期からⅤ期までを含んでいるようである。また，その東方約100 mの地点での調査でも，Ⅴ期～古墳期の土器が微量出土している（52－2）。一方，その北方で実施された広域立合調査では，常盤村ノ内町と東ノ町北部一帯でⅣ期の遺物包含層が確認されている（52－3）。こうした成果からみて，低位段丘上にあるこの遺跡は，東側の御室川と，西側にかって存在していたと予想されるその分流とにはさまれた，自然堤防上の微高地にある，弥生中期を主体とした遺跡とみなされる。より下流にある和泉式部町遺跡が後期以降に大規模化していくことから，その時期的補完関係が注意されるとともに，上流の梅ケ畑銅鐸出土地との関係も注意される。

53．和泉式部町遺跡

市772，府27－53

昭和60年度の広域立合調査で新たに発見された。その際には，蚕の社北方一帯に展開するⅤ期後半以降

の遺跡範囲が，該期の土器包含層である黒褐色砂泥層の広がりとして把握されるとともに，竪穴住居や土坑・溝など多くの遺構も確認されている（53－１・２）。また，その後の発掘調査ではⅣ期の竪穴住居１棟と土器・鉄製品が出土している（53－３）。よって遺跡の始まりは中期にさかのぼることは明らかだが，これまでの成果からは，その中心はⅤ期新相から古墳時代にあるといえる。

54．西野町遺跡

市775，府26－37

桂川の東岸では最も西側に位置する遺跡であり，有栖川を西に望み，北方より張りだした段丘と扇状地の末端に位置するとともに，後背低地に接する複雑な地形環境にある。遺跡はⅥ期以降を中心にし，竪穴住居などが多く確認されている（54－２・３・４）。ただし，昭和56年度に嵯峨野小学校内で実施された調査では，該期の住居祉より大型石包丁片の出土が報告されており（54－１），弥生期の遺跡も存在している可能性が高いと判断している。

〈Ｇ－２群の遺跡〉

55．北野（北野廃寺下層）遺跡

史53，市41，府27－34

北野廃寺跡の調査の際に，弥生期にさかのぼる遺構・遺物が確認されている。ただし主体は古墳前期以降になるようである。弥生期として報告されているのは，洛星高校南側でのⅤ期の土坑の確認例がある（55－１）。このほか，1978年に北野下白梅町地内で実施された調査でⅤ期末の竪穴住居が確認されているらしいが（第６回調査成果交流会資料），詳細は不明である。いずれにしろ，白梅町駅の西側周辺に該期の遺跡が存在するものと想定しておきたい。

56．大将軍遺跡

史54

北野遺跡の南約300ｍに位置する。大将軍小学校内で実施された調査では，Ⅴ期の溝や土器の出土が報告されている（56－２）。その南西の山城高校内の調査では，弥生期にさかのぼる遺構の確認はみていないものの，石斧・石鏃類の出土があり，古墳前期の遺構と関連する黒色粘土層が確認されている（56－１）。この黒粘層は北野遺跡でも随所で確認されており，地点によっては弥生期にさかのぼる時代の包含層になる可能性があるとみられる。紙屋川西岸の自然堤防上に接して位置するこの２遺跡は，今後の調査次第では同一遺跡としてくくり得るかもしれないが，ここではさしあたり別遺跡として考えておきたい。

57．西ノ京春日町遺跡

史58，市307，府27－３

天神川の西岸，南へ張り出す西陣台地の突端に，広い範囲で登録されているが，弥生期の遺跡としては天神川以北・以西にほぼ限定されるものと想定している。昭和63年度の調査ではⅤ期以降古墳期にかけての南北方向の溝が確認されており，土器および磨製石鏃が出土している（57－２）。また，この北方の調査でも弥生期の石鏃の出土をみている（57－１）。これらの成果から，Ⅴ期以降を主体とする遺跡と想定されるが，石器類の出土から中期にさかのぼる可能性もあろう。

58．山ノ内山の下町遺跡

史75，市781，府27－61

右京区山ノ内小学校敷地を中心に，Ⅴ期の遺構や包含層が確認されているとされるが，詳細は不明である。呈示されている土器は，Ⅴ期末葉以降とみられる（史）。

〈遺跡別参考文献〉

A群

(1) 岩倉忠在地遺跡

1 同志社大学校地学術調査委員会「岩倉校地体育講義棟建設予定地発掘調査概要」『同志社大学校地学術調査委員会調査資料』№6～9，1976
2 同志社大学校地学術調査委員会「同志社キャンパス内出土の遺構と遺物」『同志社校地内埋蔵文化財調査報告』資料編Ⅰ・1977-5，1977
3 ㈶京都市埋蔵文化財研究所『岩倉忠在地遺跡　東川流域の浸水防除工事に伴う立合調査概要』昭和55年度，1981
4 前田義明「岩倉忠在地遺跡」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要』（発掘調査編），1983
5 同志社高校・同志社大学校地学術調査委員会『同志社高等学校理科館改築に伴う埋蔵文化財の調査』，1991
6 京都大学考古学研究会『岩倉古窯跡群』，1992

B群

(2) 植物園北遺跡

1 ㈶京都市埋蔵文化財研究所『坂東善平収蔵品目録』，1980
2 辻　裕司「植物園北遺跡立合調査（№383）」『京都市内遺跡試掘・立合調査報告』昭和54年度，1980
3 家崎孝治「46　植物園北遺跡(1)」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1984
4 久世康博「47　植物園北遺跡(2)」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1984
5 京都市文化観光局・㈶京都市埋蔵文化財研究所『植物園北遺跡発掘調査概報』昭和59年度，1985
6 辻　裕司「41　植物園北遺跡」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1987
7 小森俊寛・原山充志ほか「26　植物園北遺跡」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和61年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1989
8 京都市文化観光局『植物園北遺跡発掘調査概報』平成元年度，1990
9 高橋　潔「北区上賀茂松本町の調査」京都市考古資料館『第47回京都市考古資料館文化財講座資料』，1991
10 平安京調査会・ノートルダム女子大学『ノートルダム女子大学構内発掘調査報告 ── 植物園北遺跡 ──』，1991
11 峰　　魏「植物園北遺跡の調査（第９次）」京都市考古資料館『第49回京都市京都市考古資料館文化財講座資料』，1991
12 ㈶京都市埋蔵文化財研究所『「植物園北遺跡」現地説明会資料』，1992
13 竹原一彦「4.　植物園北遺跡第11次発掘調査概要」㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査概報』第54冊，1993
14 岸岡貴英ほか「3.　植物園北遺跡第13次発掘調査概要」㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査概報』第58冊，1994
15 高　正龍・平方幸雄「41　植物園北遺跡１」㈶京都市埋蔵文化財研究所『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1994
16 長戸満男・小森俊寛「42　植物園北遺跡２」㈶京都市埋蔵文化財研究所『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1994
17 高橋　潔「27　植物園北遺跡」㈶京都市埋蔵文化財研究所『平成２年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1994

C－１群

(3) 修学院小学校（沖殿町）遺跡

1 京都大学文学部博物館『先史時代の北白川』，1991

(4) 一乗寺向畑町遺跡

1 佐原　眞「京都市一乗寺縄文文化遺跡の調査」『古代文化』７-２，1961
2 田辺昭三「農業の展開」林屋辰三郎編『京都の歴史』第一巻・平安の新京，1970
3 鈴木廣司・堀内明博「40　一乗寺松田町遺跡隣接地」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1985
4 京都大学文学部博物館『先史時代の北白川』，1991

C－２群

(5) 北白川上終町（北白川廃寺下層）遺跡

1 梅原末治「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第16冊，1935
2 辻　純一「51　北白川廃寺」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要』（発掘調査編），1983
3 家崎孝治「Ⅰ　北白川廃寺跡（ＫＳ12）」京都市文化観光局・㈶京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡試掘立合調査概報昭和58年度』，1984
4 家崎孝治「Ⅳ　北白川廃寺跡（ＫＳ13）」京都市文化観光局・㈶京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡試掘立合調査概報昭和61年度』，1987
5 家崎孝治「Ⅶ　北白川廃寺跡（ＫＳ20）」京都市文化観光局・㈶京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡試掘立合調査概報昭和62年度』，1988
6 京都市文化観光局『北野廃寺・北白川廃寺跡発掘調査概報』平成２年度，1991
7 京都大学文学部博物館『先史時代の北白川』，1991
8 網　伸也「29　北白川廃寺１」㈶京都市埋蔵文化財研究所『平成２年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1994

(6) 北白川小倉町別当町遺跡

1 梅原末治「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第16冊，1935
2 東京考古学会「京都市北白川別当町新発見の縄文式土器（図版解説）『考古学』10-4，1939

3　吉崎　伸・平方幸雄「52小倉町別当町遺跡」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要』（発掘調査編），1983
4　京都大学文学部博物館『先史時代の北白川』，1991

(7)　北白川追分町（京都大学北部構内）遺跡

1　石田志朗・中村徹也ほか『京都大学理学部構内遺跡発掘調査の概要』，1972
2　中村徹也・岡内三眞ほか『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要』（Ⅰ），1974
3　中村徹也『京都大学理学部ノートバイオトロン実験装置室新営工事にともなう埋蔵文化財発掘調査の概要（京都大学植物園縄文遺跡）』，1974
4　中村徹也『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要』（Ⅱ），1975
5　泉　拓良・吉野治雄ほか「農学部遺跡ＢＥ33区の発掘調査」京都大学農学部構内遺跡調査会・京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所構内遺跡調査会『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和51年度』，1977
6　吉野治雄「京都大学吉田キャンパスの試掘と立合調査」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和52年度』，1978
7　岡田保良・吉野治雄「京大理学部遺跡ＢＥ29区の発掘調査」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和53年度』，1979
8　泉　拓良・宇野隆夫「京都大学農学部遺跡ＢＧ32区の発掘調査」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和53年度』，1979
9　泉　拓良・宇野隆夫「京都大学農学部遺跡ＢＧ31区の発掘調査」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和54年度』，1980
10　浜崎一志「京都大学北部構内ＢＤ30区の発掘調査」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和56年度』，1983
11　帝塚山考古学研究所『弥生前期地域論』，1984
12　泉　拓良・家根祥多ほか「遺物」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ ── 北白川追分町縄文遺跡の調査 ──』，1985
13　泉　拓良「近畿地方の事例研究」『講座考古地理学』第４巻・村落と開発，1985
14　泉　拓良・三宅由美「京都大学北部構内ＢＥ33区の発掘調査」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和58年度』，1986
15　京都大学北部構内ＢＦ31区調査班「北白川追分町遺跡の発掘調査」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和59年度』，1987
16　宮本一夫「京都大学北部構内ＢＪ31区の発掘調査」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和60年度』，1988
17　浜崎一志・千葉　豊「京都大学北部構内ＢＤ33区の発掘調査」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報　1987年度』，1990
18　京都大学文学部博物館『先史時代の北白川』，1991
19　三好博喜「4．京大北部構内遺跡発掘調査概要」㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査概報』第41冊，1991
20　西川幸治・大山喬平ほか「北部構内ＢＤ28区の試掘調査」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報　1988年度』，1992
21　小野山節・清水芳裕ほか「北部構内ＢＡ28区の試掘調査」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報　1988～1991年度』，1993
22　京都大学北部構内ＢＡ28区調査班「京都大学北部構内ＢＡ28区の発掘調査」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報　1992年度』，1995（本年報）

(8)　吉田山西麓遺跡第１地点（京都大学本部構内）

1　京都大学文学部『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第１部日本先史時代，1960
2　樋口隆康・亀井節夫「昭和53年度京都大学構内遺跡調査の大要と成果」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和53年度』，1979
3　吉野治雄「京都大学吉田キャンパスの試掘調査（工学部機械系校舎新営予定地ＡＴ29区）」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和54年度』，1980
4　泉　拓良・浜崎一志「京都大学構内の試掘・立合調査」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和55年度』，1981
5　五十川伸矢「京都大学本部構内ＡＸ28区の発掘調査」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和56年度』，1983
6　泉　拓良・吉野治雄「京都大学本部構内ＡＴ29区の発掘調査」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和58年度』，1986
7　森下章司「弥生時代の銅鏃」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学埋蔵文化財ニュース』１，1991
8　五十川伸矢・千葉　豊ほか「京都大学本部構内ＡＷ27区の発掘調査」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報　1988年度』，1992

(9)　吉田山西麓遺跡第２地点（京都大学総合人間学部・吉田近衛町）

1　藤岡謙二郎「北白川扇状地と教養部構内発見の遺物包含層並びにその先史地理学的意義」京都大学教養部『人文』19，1973
2　吉野治雄「教養部遺跡ＡＬ24区立合調査」京都大学農学部構内遺跡調査会・京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所構内遺跡調査会『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和51年度』，1977
3　樋口隆康・宇野隆夫「昭和52年度京都大学構内遺跡調査の成果」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研

究年報　昭和52年度』，1978
4　宇野隆夫「京都大学吉田キャンパスの試掘調査（教養部エレベーター新営予定地の試掘調査）」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和53年度』，1979
5　岡田保良「京都大学吉田キャンパスの試掘調査（教養部電気管理設予定地ＡＭ24区）」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和54年度』，1980
6　泉　拓良「京都大学教養部構内ＡＯ21区の発掘調査」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和56年度』，1983
7　五十川伸矢・飛野博文「京都大学教養部構内ＡＰ22区の発掘調査」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和57年度』，1984
8　西川幸治・久馬一剛ほか「３　教養部構内ＡＬ23区の試掘調査）」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報　1986年度』，1989
9　難波洋三「京都大学教養部構内ＡＰ25区の発掘調査」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報1986年度』，1989
10　㈶京都文化財団『吉田近衛町遺跡』，1989
11　小野山　節・清水芳裕ほか「４　教養部構内ＡＲ21区の立合調査」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報　1989～1991年度』，1993
12　京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学総合人間学部（旧教養部）構内の遺跡 ── 京都大学ＡＯ22区発掘調査現地説明会資料 ──』，1994
13　京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学総合人間学部（旧教養部）構内の遺跡 ── 京都大学ＡＯ22区発掘調査第二次現地説明会資料－』，1994

⑽　吉田山西麓遺跡第３地点（京都大学医学部・病院構内）

1　岡田保良・宇野隆夫「京大病院遺跡ＡＦ14区の発掘調査」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報昭和52年度』，1978
2　京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学埋蔵文化財調査報告II ── 白河北殿北辺の調査 ──』，1981
3　岡田保良「白河北殿跡比定地ＡＡ18区の試掘調査」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和53年度』，1979
4　樋口隆康・亀井節夫ほか「昭和54年度京都大学構内遺跡調査の大要と成果」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和54年度』，1980
5　清水芳裕・吉野治雄「京都大学医学部構内ＡＰ19区の発掘調査」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和55年度』，1981
6　五十川伸矢「京都大学医学部構内ＡＮ20区の発掘調査」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報昭和58年度』，1986
7　五十川伸矢・浜崎一志「京都大学病院構内ＡＪ18・ＡＪ19区の発掘調査」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報　1986年度』，1989
8　千葉　豊「病院構内の先史時代遺跡」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学埋蔵文化財調査報告IV ── 京都大学病院構内遺跡の調査 ──』，1991
9　浜崎一志・千葉　豊ほか「京都大学病院構内ＡＨ19区の発掘調査」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報　1989～1991年度』，1993
10　五十川伸矢・伊藤淳史「京都大学医学部構内ＡＭ17区の発掘調査」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報　1992年度』，1995（本年報）

⑾　岡崎遺跡

1　杉山信三ほか「尊勝寺跡発掘調査報告 ── 京都会館建設地の調査 ── 」奈良国立文化財研究所『平城宮跡・伝飛鳥板葺宮跡発掘調査報告』，1961
2　円勝寺発掘調査団「円勝寺の発掘調査（上）」『仏教芸術』第82号，1971
3　飛野博文「山城の弥生後期土器 ── 京都市左京区岡崎南御所町採集の土器」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和56年度，1983
4　鈴木廣司・平方幸雄「38　法勝寺跡」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要』（発掘調査編），1983
5　辻　裕司・丸川義男「23　尊勝寺跡」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1984
6　辻　裕司・平方幸雄「24　法勝寺跡(1)」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1984
7　辻　裕司・鈴木廣司「19　尊勝寺跡」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1985
8　㈶京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡発掘資料選㈡』，1986
9　梶川敏夫「14　尊勝寺跡」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1987
10　小森俊寛「13　白河街区３」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1988
11　上村和直・辻　裕司「17　尊勝寺跡」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和61年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1989
12　上村和直「26　岡崎遺跡法勝寺隣接地」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1991
13　平方幸雄「27　法勝寺跡」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1991
14　上村和直「28　尊勝寺跡」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1991
15　㈶京都市埋蔵文化財研究所『白河街区跡（推定最勝寺跡）の発掘調査成果』，1992
16　㈶京都市埋蔵文化財研究所『白河街区跡（推定成勝寺跡）発掘調査現地説明会資料』，1992
17　網　伸也「勧業館跡地の調査」㈶京都市埋蔵文化財研究所『第65回京都市考古資料館文化財講座資料』，1993

18　梶川敏夫「Ⅴ　成勝寺跡（六勝寺の一寺院）№61」京都市文化観光局『京都市内遺跡試掘調査概報』平成３年度，1993
19　吉村正親「２　六勝寺跡（93ＫＳ173）」京都市文化観光局『京都市内遺跡立合調査概報』平成５年度，1994
20　上村和直・西大條哲「29　尊勝寺跡・岡崎遺跡１」㈶京都市埋蔵文化財研究所『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1994
21　上村和直・西大條哲「30　尊勝寺跡・岡崎遺跡２」㈶京都市埋蔵文化財研究所『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1994
22　内田好昭「31　法勝寺跡・岡崎遺跡」㈶京都市埋蔵文化財研究所『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1994
23　会下和宏「岡崎遺跡の方形周溝墓について」㈶京都市埋蔵文化財研究所『研究紀要』第１号，1995

Ｄ群

⑿　芝町遺跡

1　酒詰仲男「深草地区の遺跡発掘調査概報」『名神高速道路線地域内埋蔵文化財調査報告』，1959
2　橘女子大学考古学研究会『第二次山科分布踏査概報』，1977

⒀　旭山遺跡

1　㈶京都市埋蔵文化財研究所『旭山古墳群発掘調査報告』，1981

⒁　左義長町（山科本願寺跡下層）遺跡

1　黒坪一樹「５　山科本願寺跡」㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査概報』第18冊，1986
2　平方幸雄「12　山科本願寺跡」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1987

⒂　中臣遺跡

1　田辺昭三・山本忠尚「26-14　中臣遺跡」日本考古学協会『日本考古学年報』24，1971
2　「中臣遺跡」1973，京都市文化観光局文化財保護課『京都市埋蔵文化財年次報告』1973-Ⅲ，1974
3　「中臣遺跡」1974，京都市文化観光局文化財保護課・中臣遺跡調査団『京都市埋蔵文化財年次報告』1974-Ⅲ，1975
4　浪貝　毅「26-33　中臣遺跡(1)」日本考古学協会『日本考古学年報』29，1976
5　浪貝　毅「26-34　中臣遺跡(2)」日本考古学協会『日本考古学年報』29，1976
6　浪貝　毅「26-35　中臣遺跡(3)」日本考古学協会『日本考古学年報』29，1976
7　「中臣遺跡発掘調査概要」，京都市文化観光局文化財保護課『京都市埋蔵文化財年次報告』1975，1976
8　㈶京都市埋蔵文化財研究所『中臣遺跡発掘調査概要』1977，1977
9　菅田　薫「中臣遺跡」『仏教芸術』第115号，1977
10　菅田　薫「中臣遺跡」㈶京都市埋蔵文化財研究所『京都市埋蔵文化財研究所概報集』1977-1，1977
11　㈶京都市埋蔵文化財研究所『中臣遺跡　建設省国庫補助事業による発掘調査の概要』1977年度，1978
12　㈶京都市埋蔵文化財研究所『中臣遺跡　文化庁国庫補助事業による発掘調査概要』1977年，1978
13　㈶京都市埋蔵文化財研究所『中臣遺跡　建設省国庫補助事業による発掘調査の概要』1978年度，1979
14　㈶京都市埋蔵文化財研究所『中臣遺跡　文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要』1978年度，1979
15　㈶京都市埋蔵文化財研究所『中臣遺跡　文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要』1979年度，1980
16　㈶京都市埋蔵文化財研究所『中臣遺跡　昭和54年度山科川中小河川改修事業に伴う発掘調査の概要』1979年度，1980
17　㈶京都市埋蔵文化財研究所『中臣遺跡　昭和55年度京都都市計画道路２等大路第１類５号西山大宅線整備事業に伴う発掘調査概要』，1980
18　㈶京都市埋蔵文化財研究所『中臣遺跡　昭和55年度山科川中小河川改修事業に伴う発掘調査の概要』，1981
19　京都市埋蔵文化財調査センター・㈶京都市埋蔵文化財研究所『中臣遺跡発掘調査概要』昭和55年度，1981
20　京都市文化観光局・㈶京都市埋蔵文化財研究所『中臣遺跡発掘調査概要』昭和56年度，1982
21　京都市文化観光局・㈶京都市埋蔵文化財研究所『中臣遺跡発掘調査概報』昭和57年度，1983
22　京都市文化観光局・㈶京都市埋蔵文化財研究所『中臣遺跡発掘調査概報』昭和58年度，1984
23　京都市文化観光局・㈶京都市埋蔵文化財研究所『中臣遺跡発掘調査概報』昭和59年度，1985
24　京都市文化観光局・㈶京都市埋蔵文化財研究所『中臣遺跡発掘調査概報』昭和60年度，1986
25　京都市文化観光局・㈶京都市埋蔵文化財研究所『中臣遺跡発掘調査概報』昭和61年度，1987
26　京都市文化観光局・㈶京都市埋蔵文化財研究所『中臣遺跡発掘調査概報』昭和62年度，1988
27　平方幸雄・辻　純一「Ⅳ中臣遺跡　44　第45次調査」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要』（発掘調査編），1983
28　平方幸雄・磯部　勝「Ⅳ中臣遺跡　45　第46次調査」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要』（発掘調査編），1983
29　平方幸雄・前田義明「Ⅴ中臣遺跡　37　第51次調査」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1984
30　平方幸雄・辻　裕司「Ⅴ中臣遺跡　38　第52次調査」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1984
31　平方幸雄・辻　裕司「Ⅴ中臣遺跡　39　第53次調査」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1984
32　平方幸雄・辻　裕司「Ⅴ中臣遺跡　33　第55次調査」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1985
33　平方幸雄・辻　裕司「Ⅴ中臣遺跡　34　第56次調査」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1985
34　平方幸雄・辻　裕司「Ⅴ中臣遺跡　35　第57次調査」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』，

1985
35　菅田　薫・辻　純一「27　中臣遺跡第59次調査」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1987
36　菅田　薫・辻　純一「28　中臣遺跡第60次調査」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1987
37　平方幸雄「11　中臣遺跡，中臣十三塚，宮道古墳」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1987
38　菅田　薫「29　中臣遺跡第61次調査」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1988
39　丸川義広・木下保明「31　中臣遺跡第64次調査」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1988
40　丸川義広・木下保明「32　中臣遺跡第65次調査」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1988
41　平方幸雄・菅田　薫「22　中臣遺跡第67次調査」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和61年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1989
42　平方幸雄「34　中臣遺跡第68次調査」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1991
43　高橋　潔・平方幸雄「34　中臣遺跡第70-2次調査」㈶京都市埋蔵文化財研究所『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1994
44　高橋　潔「6　中臣遺跡第70-3次調査」㈶京都市埋蔵文化財研究所『平成2年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1994
45　㈶京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡発掘資料選(二)』，1986

⒃　大宅（大宅廃寺下層）遺跡

1　㈶京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡発掘資料選(二)』，1986
2　平方幸雄・菅田　薫「42　大宅廃寺」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1988

⒄　勧修寺旧境内遺跡

1　平方幸雄・菅田　薫ほか「36　勧修寺旧境内」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1991

⒅　小栗栖遺跡

該当文献なし

E－1群

⒆　轆轤町遺跡

該当文献なし

⒇　南日吉町遺跡

1　京都大学文学部『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第一部日本先史時代，1960
2　都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係 ── 淀川水系を中心に ──」『考古学研究』20－4

(21)　月輪遺跡

該当文献なし

(22)　稲荷山西麓（法性寺跡・正覚寺跡下層）遺跡

1　吉村正親「17　法性寺跡・正覚寺跡」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1991

(23)　深草遺跡

1　辻井喜一郎「京都南郊深草低地における弥生式遺跡の発見と遺物」『史琪と美術』第266号，1954
2　杉原荘介「京都府京都市深草遺跡」日本考古学協会『日本考古学年報』9，1961
3　杉原荘介・大塚初重「京都府深草遺跡」日本考古学協会『日本農耕文化の生成』第一冊本文編，1961
4　網干善教「京都府深草弥生式遺跡の調査」日本考古学協会『日本考古学協会昭和39年度大会研究発表要旨』，1964
5　宇佐晋一・小川敏夫ほか「深草遺跡」『古代学研究』第39号，1964
6　網干善教「深草遺跡出土木製鍬の一例について」『龍谷史壇』55，1965
7　中谷雅治「深草遺跡の調査」『古代文化』17-2，1966
8　堤圭三郎「深草遺跡発掘調査概要」京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』1966，1967
9　「深草弥生式遺跡調査概報」京都大学考古学研究会『第17とれんち』，1966
10　林　和廣「深草遺跡出土の弥生式土器」京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』1974，1974
11　京都考古学研究会『東山・伏見地域に於ける文化財保存の現状と課題 ── 京都考古学研究会第一次分布調査より ──』，1975
12　鈴木久男「深草遺跡」㈶京都市埋蔵文化財研究所『京都市埋蔵文化財研究所概報集』1977-1，1977
13　㈶京都市埋蔵文化財研究所『深草遺跡　砂川小学校校舎改築に伴う試掘調査概要』昭和54年度，1980
14　㈶京都市埋蔵文化財研究所『深草遺跡（深草西児童公園内，防火水槽工事に伴なう発掘調査概要）』昭和54年度，1980
15　㈶京都市埋蔵文化財研究所『深草寺跡　深草中学校校舎増築工事に伴う発掘調査の概要』昭和52年度，1980
16　竹井治雄・黒坪一樹「3　深草遺跡発掘調査概要」㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査概報』8，1983
17　黒沢　浩「弥生時代石器の基礎的研究(1) ── 京都市深草遺跡出土の石器 ──」明治大学考古学博物館『明治大学考古学博物館報』№6，1991

(24)　谷口町遺跡

1　小川敏夫「京都市深草で発見した晩期縄文土器」『古代学研究』第18号，1958

E－2群

(25)　伏見城下町下層（桃山弾正町）遺跡

1　小森俊寛・原山充志「54　伏見城跡3」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1993

E－3群

(26)　鳥羽（離宮下層）遺跡

1　㈶京都市埋蔵文化財研究所『鳥羽離宮跡　国庫補助による発掘調査概要』昭和52年度，1978

2　京都市文化観光局・㈶京都市埋蔵文化財研究所『鳥羽離宮跡　文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要』1979年度，1980
3　㈶京都市埋蔵文化財研究所『鳥羽離宮跡　区画整理道路予定地内発掘調査概要』昭和54年度，1980
4　京都市埋蔵文化財調査センター・㈶京都市埋蔵文化財研究所『鳥羽離宮跡調査概要』昭和55年度，1981
5　京都市文化観光局・㈶京都市埋蔵文化財研究所『鳥羽離宮跡調査概要』昭和56年度，1982
6　京都市文化観光局・㈶京都市埋蔵文化財研究所『鳥羽離宮跡発掘調査概要』昭和59年度，1985
7　京都市文化観光局・㈶京都市埋蔵文化財研究所『鳥羽離宮跡発掘調査概報』昭和60年度，1986
8　京都市文化観光局・㈶京都市埋蔵文化財研究所『鳥羽離宮跡発掘調査概報』昭和61年度，1987
9　鈴木久男「鳥羽離宮跡試掘調査（№133）」京都市文化観光局文化財保護課『京都市内遺跡試掘・立合調査報告』昭和54年度，1980
10　長宗繁一「40　第70次調査」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要』（発掘調査編），1983
11　木下保明・本　弥八郎「41　第71次調査」㈶京都市埋蔵文化財研究所『『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要』（発掘調査編），1983
12　鈴木廣司・吉崎　伸「35　第84次調査」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1984
13　前田義明・長宗繁一「24　第89次調査」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1985
14　長宗繁一・前田義明「24　第90次調査」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1985
15　中村　敦「28　93Ⅰ次調査」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1985
16　前田義明・堀内明博「29　第93Ⅱ次調査」㈶京都市埋蔵文化財研究所『『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1985
17　吉崎　伸・鈴木久男「鳥羽離宮跡第97次調査」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1987
18　鈴木久男・吉崎　伸「19　鳥羽離宮跡第102次調査」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1987
19　堀内明博・前田義明「20　鳥羽離宮跡第103次調査」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1987
20　吉崎　伸・中村　敦「21　鳥羽離宮跡第104次調査」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1987
21　堀内明博・吉崎　伸「23　鳥羽離宮跡第106次調査」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1987
22　磯部　勝「9　鳥羽離宮跡3」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1988
23　鈴木久男「3　鳥羽離宮跡」㈶京都市埋蔵文化財研究所『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1994
24　㈶京都市埋蔵文化財研究所『増補改編　鳥羽離宮跡』1984
25　㈶京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡発掘資料選㈡』，1986

㉗　下鳥羽（芹川）遺跡

1　中塚　良・木立雅明ほか「下鳥羽周辺分布調査・試錐調査報告 ── 表層地質と遺跡立地 ──」『京都考古』30，1983
2　京都市文化観光局『下鳥羽遺跡発掘調査概報』昭和62年度，1988
3　前田義明「下鳥羽遺跡の調査」『第25回京都市考古資料館文化財講座資料』，1989
4　前田義明・磯部　勝「33　下鳥羽遺跡」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1991
5　磯部　勝「7　下鳥羽遺跡」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1993
6　竜子正彦・吉村正親「6　下鳥羽遺跡(92 TB 325)」京都市文化観光局『京都市内遺跡立合調査概報』平成5年度，1994

F－1群

㉘　柳池中学校（烏丸御池）遺跡

1　小森俊寛・長門満男ほか「11　平安京左京三条四坊」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1993
2　小森俊寛・上村憲章ほか「10　平安京左京三条四坊」㈶京都市埋蔵文化財研究所『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1994

㉙　高倉宮下層遺跡

1　㈶古代学協会『東洞院大路・曇華院跡』，1977
2　㈶古代学協会『高倉宮・曇華院跡第4次調査』，1987
3　㈶京都文化財団『平安京左京三条四坊四町　京都市中京区曇華院前ノ町』，1988
4　南　博史「平安京高倉宮出土の縄文晩期深鉢と土偶」『古代文化』40-4，1988
5　江谷　寛「平安京内に建てられた寺院 ── 京都市六角堂境内地」『季刊考古学』第49号，1994

㉚　烏丸綾小路（長刀鉾町）遺跡

1　京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会『平安京関係遺跡発掘調査概報 ── 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡発掘調査 ──』，1975
2　京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』Ⅰ1974,75年度，1979
3　京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』Ⅱ本文編1976年度，1980
4　長宗繁一「左京五条四坊跡試掘調査（№178）」京都市文化観光局文化財保護課『京都市内遺跡試掘・立合調査報告』昭和54年度，1980
5　辻　裕司「左京五条二坊跡立合調査（№353）」京都市文化観光局文化財保護課『京都市内遺跡試掘・立合調査報告』昭和54年度，1980
6　上村和直「Ⅷ　平安京左京四条三坊跡」京都市文化観光局・㈶京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡発掘調査概報文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要』1979年度，1980
7　京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』Ⅲ本文編1977～1981年度，1981

8　㈶古代学協会『平安京跡研究調査報告第5輯　平安京左京五条三坊十五町』，1981
9　㈶古代学協会『平安京左京四条三坊十三町 ── 長刀鉾町遺跡 ──』，1984
10　「9　左京四条三坊」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1984
11　㈶古代学協会『平安京左京六条二坊六町　平安京跡研究調査報告第17集』，1986
12　㈶京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡発掘資料選㈡』，1986
13　上村和直・久世康博「7　平安京左京六条二坊」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1987
14　小森俊寛「6　平安京左京四条四坊」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1988
15　家崎孝治「XI　主要な出土遺物」京都市文化観光局・㈶京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡試掘立合調査概報』昭和62年度，1988
16　小森俊寛・原山充志「6　平安京左京四条四坊」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和61年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1989
17　小森俊寛「12　平安京左京五条四坊」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1991
18　㈶京都文化博物館『平安京左京五条二坊十六町　京都市下京区傘鉾町』，1991
19　尾藤徳行・竜子正彦ほか「3　左京四条三坊十一町(91 HL 367)」京都市文化観光局『京都市内遺跡立合調査概報』平成4年度，1993
20　伊藤　潔・川村雅章ほか「4　左京四条三坊十一町(92 HL 44)」京都市文化観光局『京都市内遺跡立合調査概報』平成4年度，1993
21　尾藤徳行「6　左京五条三坊五町」京都市文化観光局『京都市内遺跡立合調査概報』平成5年度，1994
22　小森俊寛・原山充志「11　平安京左京四条三坊1」㈶京都市埋蔵文化財研究所『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1994
23　小森俊寛・上村憲章「12　平安京左京四条三坊2」㈶京都市埋蔵文化財研究所『平成元年度京　都市埋蔵文化財調査概要』，1994
24　山本雅和「7　平安京左京四条四坊」㈶京都市埋蔵文化財研究所『平成2年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1994
25　百瀬正恒・辻　祐司ほか「8　平安京左京四条四坊」㈶京都市埋蔵文化財研究所『平成2年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1994
26　小森俊寛・上村憲章「9　平安京左京五条四坊」㈶京都市埋蔵文化財研究所『平成2年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1994
27　山本雅和・菅田　薫「11　平安京左京六条三坊1」㈶京都市埋蔵文化財研究所『平成2年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1994
28　高橋　潔・平方幸雄ほか「12　平安京左京六条三坊2」㈶京都市埋蔵文化財研究所『平成2年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1994
29　内田好昭・丸川義広「13　平安京左京六条三坊3」㈶京都市埋蔵文化財研究所『平成2年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1994

㉛　松原中学校遺跡

該当文献なし

㉜　中堂寺南町（坊城町）遺跡

1　山陰線高架に伴う埋蔵文化財発掘調査団『平安京跡発掘調査報告　山陰線高架建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告』，1976
2　㈶京都市埋蔵文化財研究所『平安京右京六条一坊 ── 平安時代前期邸宅跡の調査 ──』，1992
3　長宗繁一「23　平安京右京六・七条一坊」㈶京都市埋蔵文化財研究所『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1994
4　長宗繁一「24　平安京右京六条一坊」㈶京都市埋蔵文化財研究所『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1994
5　平尾政幸「20　平安京右京六城一坊」㈶京都市埋蔵文化財研究所『平成2年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1994

㉝　島原（堂ノ口町）遺跡

1　菅田　薫「左京七条一坊跡試掘調査（№447）」京都市文化観光局文化財保護課『京都市内遺跡試掘・立合調査報告』昭和54年度，1980
2　平田　泰・吉川義彦ほか「21　右京七条一坊」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1984

㉞　衣田町（西市下層・西七条市部町）遺跡

1　長宗繁一「右京八条二坊立合調査報告（№164）」京都市文化観光局文化財保護課『京都市内遺跡試掘・立合調査報告』昭和54年度，1980
2　京都市文化観光局・㈶京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡試掘、立合調査概報』昭和56年度，図版21－29，1982
3　伊藤　潔「3　平安京右京八条二坊（HR 133）」京都市文化観光局・㈶京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡試掘・立合調査概報』昭和58年度，1984
4　菅田　薫・本　弥八郎「17　右京八条二坊」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1985
5　㈶京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡発掘資料選㈡』，1986

㉟　東塩小路町遺跡

1　㈶京都市埋蔵文化財研究所『平安京左京八条三坊』，1982
2　京都市文化観光局・㈶京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡発掘調査概報』昭和57年度，1983
3　小森俊寛「7　平安京左京七条二坊・八条二坊」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1988
4　上村憲章・小森俊寛「9　左京八条三坊」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1988

㊱　烏丸町（東九条西山王町）遺跡

1　㈶京都市埋蔵文化財研究所『平安京左京九条三坊跡　京都駅南口地区第一種市街地再開発事業に伴う発掘調査の概要』昭和55年度，1981
2　小森俊寛「11　左京九条三坊(1)」『㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1985
3　小森俊寛・上村憲章「10　平安京左京九条三坊」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1987

4　百瀬正恒「3　平安京左京九条四坊」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1987
5　百瀬正恒「4　平安京左京九条三、四坊」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1988
6　引原茂治「5　平安京・烏丸町遺跡隣接地」㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査概報』第48冊，1992
7　竜子正彦・吉村正親「9　左京九条四坊五町隣接地（93 HL 228）」京都市文化観光局『京都市内遺跡立合調査概報』平成5年度，1994
8　菅田　薫「17　平安京左京九条二坊」㈶京都市埋蔵文化財研究所『平成2年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1994

㈶　東寺町遺跡

1　吉村正親「Ⅳ　平安京・左京九条二坊跡」㈶京都市埋蔵文化財研究所『京都市埋蔵文化財研究所概報集』1978-1，1978

㈳　唐橋遺跡

1　㈶京都市埋蔵文化財研究所『平安京右京九条二坊　京都市立洛陽工業高校図書館新築小路に伴う発掘調査の概要』昭和53年度，1980
2　㈶京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡発掘調査報告』昭和55年度，1981
3　百瀬正恒「14　右京九条一坊(1)」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1984
4　堀内明博・梅川光隆「18　平安京右京九条二坊」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1988
5　百瀬正恒「6　平安京右京九条一坊」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1988
6　菅田　薫「26　平安京右京九条一坊(1)」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1993

F－2群

㈴　相国寺門前町遺跡

1　同志社女子大学校地学術調査委員会「常盤井殿町遺跡発掘調査概報――同志社女子大学心和館増築地点の調査」同志社大学校地学術調査委員会調査資料』No12，1978
2　京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』Ⅰ，1979

㈵　内膳町遺跡

1　高橋美久二「内膳町遺跡」日本考古学協会『日本考古学年報』26，1973
2　高橋美久二「内膳町遺跡発掘調査概要」京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報1974』，1974
3　京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会『平安京関係遺跡発掘調査概報――京都市高速鉄道烏丸線内遺跡発掘調査』，1975
4　平良泰久・伊野近富ほか「平安京内膳町遺跡発掘調査概要」京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報1979』，1979
5　京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』Ⅰ1974,75年度，1979
6　平良泰久・奥村清一郎ほか「平安京跡（左京内膳町）昭和54年度発掘調査概要」京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報1980-3』，1983
7　伊野近富・石井清司ほか「平安京右京北辺三坊五町発掘調査概要」㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査概報』第27冊，1988
8　石井清司「11　京都市内内膳町遺跡」㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府弥生土器集成』，1989
9　辻　裕司「7　平安京左京北辺三坊」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1991

㈹　藁屋町（二条城町・七丁目・高陽院下層）遺跡

1　京都市文化観光局・㈶京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡試掘、立合調査概報』昭和56年度，図18－200，1982
2　吉崎　伸「1　左京二条二坊(1)」京都市文化観光局・㈶京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡発掘調査概報』昭和56年度，1982
3　吉崎　伸「7　左京二条二坊(1)」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要』（発掘調査編），1983
4　辻　裕司「9　左京二条二坊(3)史跡二条城」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要』（発掘調査編），1983
5　家崎孝治「5　左京二条二坊」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概報』，1985
6　内田好明「Ⅶ　平安京左京二条二坊」京都市文化観光局『平安京跡発掘調査概報』昭和63年度，1989
7　秋山浩三「河内系土器について」㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府弥生土器集成』，1989
8　網　伸也・岡田文男「Ⅴ　平安京左京二条二坊」京都市文化観光局『平安京跡発掘調査概報』平成元年度，1990
9　内田好明「9　平安京左京二条二坊・高陽院跡2」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1993
10　網　伸也「6　平安京左京二条二坊・高陽院跡1」㈶京都市埋蔵文化財研究所『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1994

㈺　烏丸丸太町遺跡

1　磯部　勝「平安京左京二条三坊十町の調査」京都市考古資料館『第57回京都市考古資料館文化財講座資料』，1992

㈻　豊楽殿跡下層遺跡

1　鈴木久男「Ⅰ　平安宮豊楽院(1)」京都市文化観光局『平安京跡発掘調査概報』昭和63年度，1989
2　鈴木久男「5　平安宮豊楽殿」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1991

㈼　上巴町遺跡

1　㈶京都市埋蔵文化財研究所『坂東善平収蔵品目録』，1980
2　丸川義広・辻　裕司「12　左京三条二坊」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要』（発掘調査編），1983

㈽　壬生遺跡

1　中村　敦「5　平安京右京三条一坊」㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1987
2　平田　泰「2　右京三条一坊八町・穀倉院（92 HR 415）」京都市文化観光局『京都市内遺跡立合調査概報』平成5年度，1994

(46) 西ノ京勧学院町遺跡
1 伊藤 潔「Ⅰ 左京三条一坊」京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡発掘調査概報』昭和58年度，1984
2 家崎孝治「5 左京三条一坊」(財)京都市埋蔵文化財研究所『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1985
(47) 壬生車庫跡遺跡
1 平安京調査会『平安京跡発掘調査報告 ―― 左京四条一坊』，1975
(48) 西院遺跡
1 百瀬正恒「11 右京五条二坊・六条二坊」(財)京都市埋蔵文化財研究所『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1984
2 高 正龍「19 平安京右京五条二坊２」(財)京都市埋蔵文化財研究所『平成２年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1994
(49) 壬生東高田町（京都市立病院構内）遺跡
1 網 伸也「22 平安京右京六条二坊１」(財)京都市埋蔵文化財研究所『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1993
(50) 西京極（西院月双町）遺跡
1 (財)京都市埋蔵文化財研究所『西部幹線公共下水道工事に伴う遺跡調査概報』1977年度，1978
2 (財)京都市埋蔵文化財研究所『西部幹線公共下水道工事に伴う遺跡調査概報』1978年度，1979
3 鈴木廣司「右京六条四坊跡立合調査（No.350）」京都市文化観光局文化財保護課『京都市内遺跡試掘・立合調査報告』昭和54年度，1980
4 (財)京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡発掘資料選(二)』，1986
5 菅田 薫「Ⅶ 平安京右京七条四坊」京都市文化観光局『平安京跡発掘調査概報』平成元年度，1990
6 (財)京都文化博物館『平安京右京六条四坊九町・五条大路 京都市右京区西院月双町』，1991
7 上村和直・西大条哲「26 平安京右京六条四坊・西京極遺跡」(財)京都市埋蔵文化財研究所『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1994
8 菅田 薫「27 平安京右京七条四坊」(財)京都市埋蔵文化財研究所『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1994

G－１群
(51) 梅ケ畑銅鐸出土地
1 田辺昭三ほか「京都市梅ケ畑出土の銅鐸」日本考古学協会『日本考古学協会昭和39年度研究発表要旨』，1964
2 (財)京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡発掘資料選(二)』，1986
(52) 常盤東ノ町遺跡
1 (財)京都市埋蔵文化財研究所『常盤東ノ町古墳群』，1977
2 百瀬正恒「Ⅱ 仁和寺子院跡」(財)京都市埋蔵文化財研究所『京都市埋蔵文化財研究所概報集』1978-1，1978
3 平田 泰・加納敬二「11 常盤東ノ町古墳群・仁和寺院家跡・広隆寺旧境内」(財)京都市埋蔵文化財研究所『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1993
(53) 和泉式部町遺跡
1 平田 泰「15 森ケ東瓦窯跡・和泉式部町遺跡」(財)京都市埋蔵文化財研究所『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1988
2 平田 泰「16 広隆寺旧境内・一ノ井遺跡・和泉式部町遺跡」(財)京都市埋蔵文化財研究所『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1988
3 辻 裕司・菅田 薫ほか「43 和泉式部町遺跡」(財)京都市埋蔵文化財研究所『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1991
(54) 西野町遺跡
1 鈴木廣司「55 嵯峨野小学校内遺跡」(財)京都市埋蔵文化財研究所『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要』（発掘調査編），1983
2 平田 泰・加納敬二「13 広隆寺旧境内・常盤伸ノ町遺跡・西野町遺跡」(財)京都市埋蔵文化財研究所『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1993
3 平田 泰・加納敬二「14 西野町遺跡・千代の道古墳」(財)京都市埋蔵文化財研究所『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1993
4 平田 泰・小檜山一良「43 西野町遺跡」(財)京都市埋蔵文化財研究所『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1993

G－２群
(55) 北野（北野廃寺下層）遺跡
1 家崎孝治「5 右京北辺二・三・四坊，一条二・三・四坊と北野廃寺・北野遺跡」(財)京都市埋蔵文化財研究所『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要』（試掘・立合調査編），1983
(56) 大将軍遺跡
1 石井清司・常盤井智行ほか「平安京跡（右京一条三坊九町）昭和54年度発掘調査概要」京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概要1980-3』1980
2 吉崎 伸「20 右京北辺三坊(1)」(財)京都市埋蔵文化財研究所『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要』（発掘調査編），1983
(57) 西ノ京春日町遺跡
1 堀内明博・吉崎 伸「11 平安京右京二条三坊１」(財)京都市埋蔵文化財研究所『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1988
2 辻 裕司「18 平安京右京二条三坊・西ノ京遺跡」(財)京都市埋蔵文化財研究所『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』，1993
(58) 山ノ内山ノ下町遺跡
該当文献なし

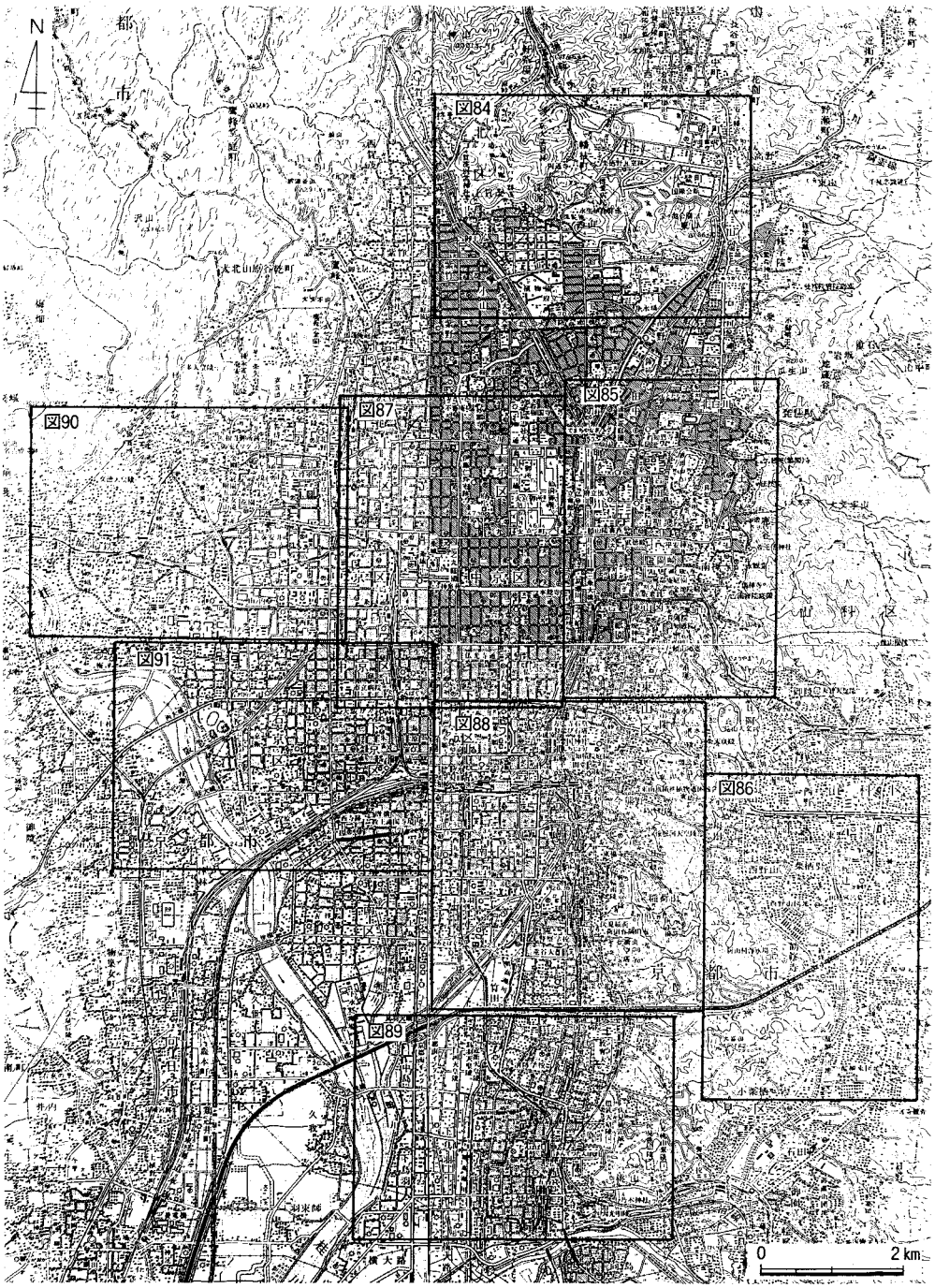

図83　図84～図91のわりつけ　縮尺 1/10万

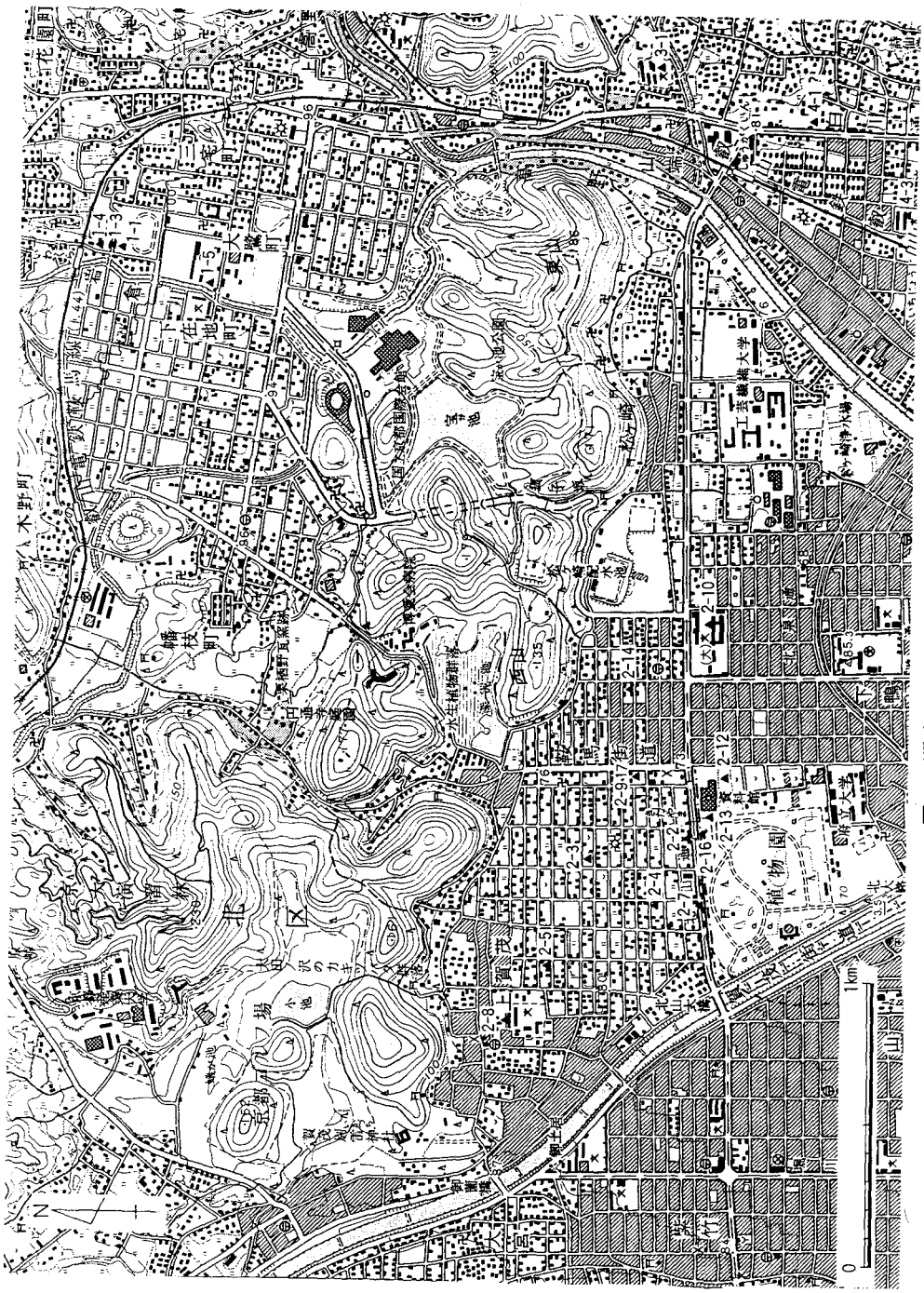

図84　関連調査地点(1)　縮尺 1/25000

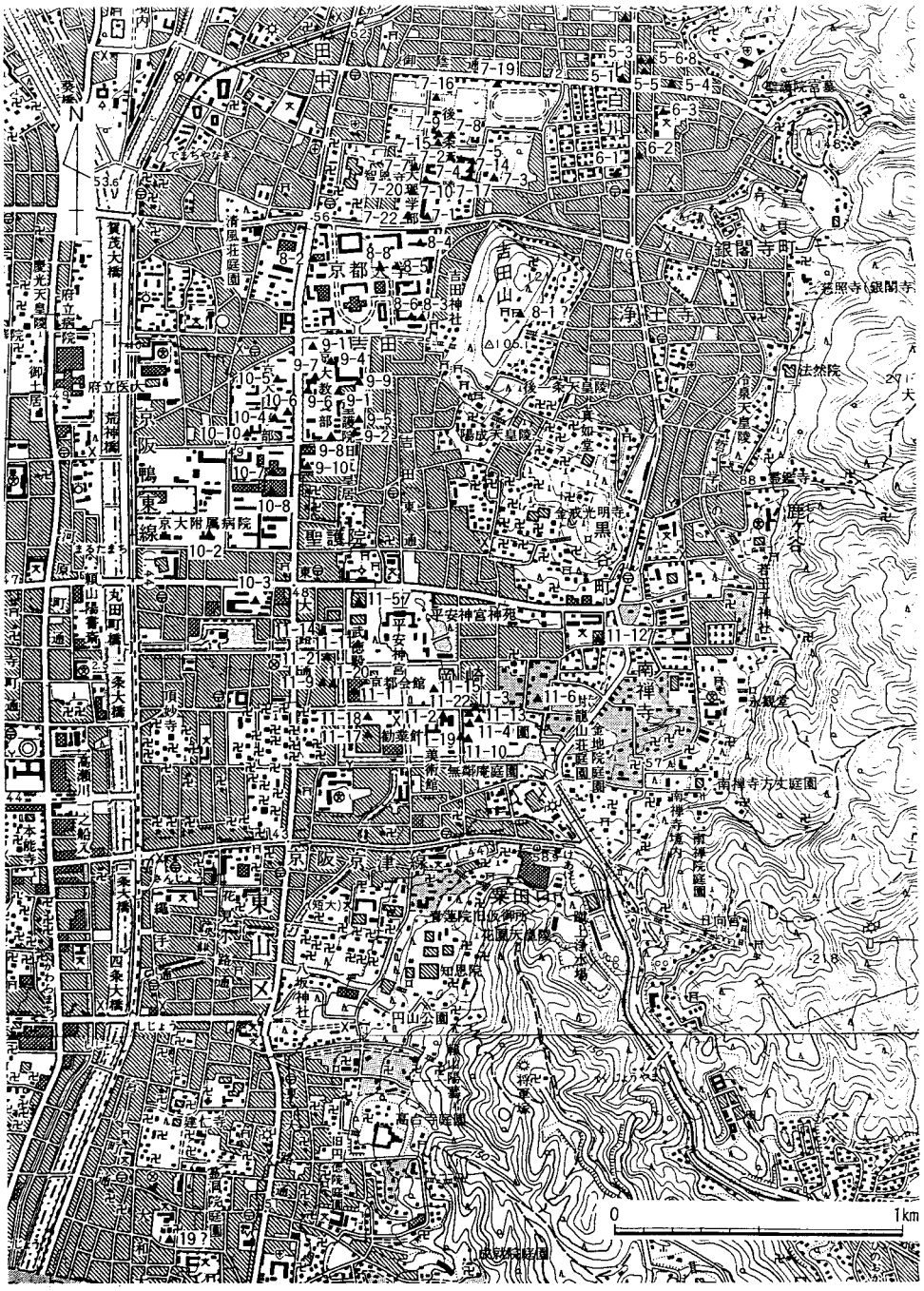

図85　関連調査地点(2)　縮尺 1/25000

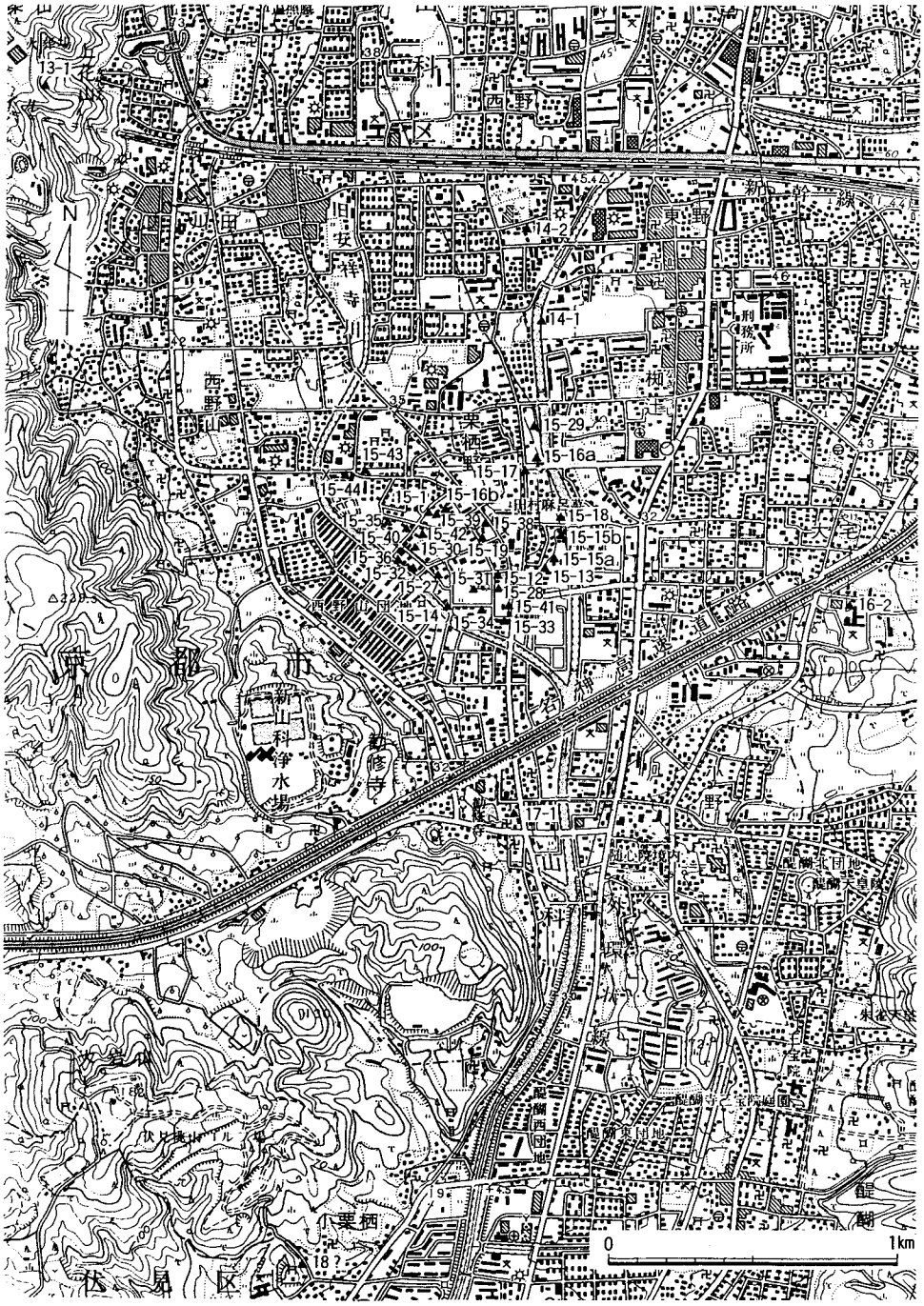

図86　関連調査地点(3)　縮尺 1/25000

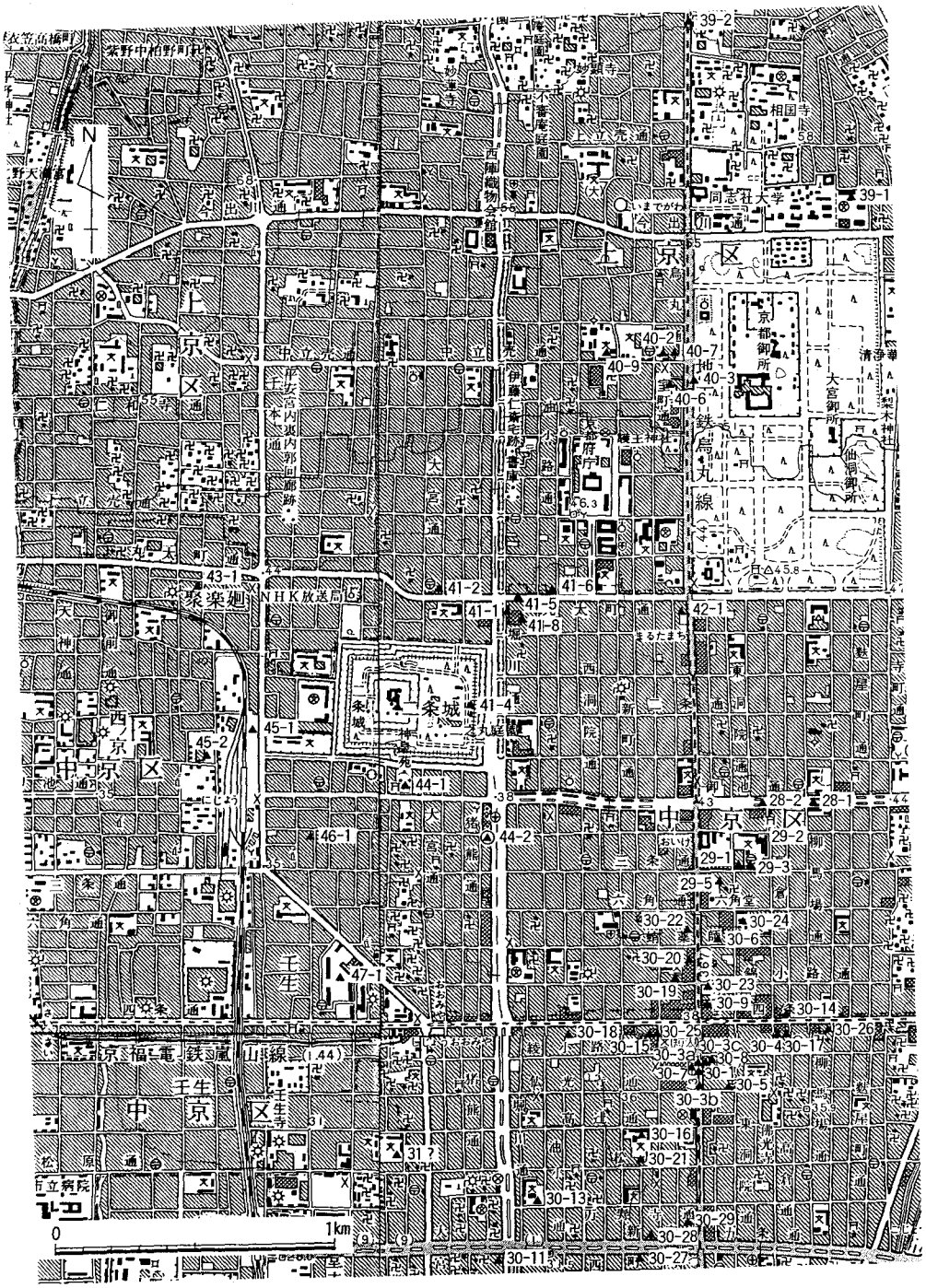

図87　関連調査地点(4)　縮尺 1/25000

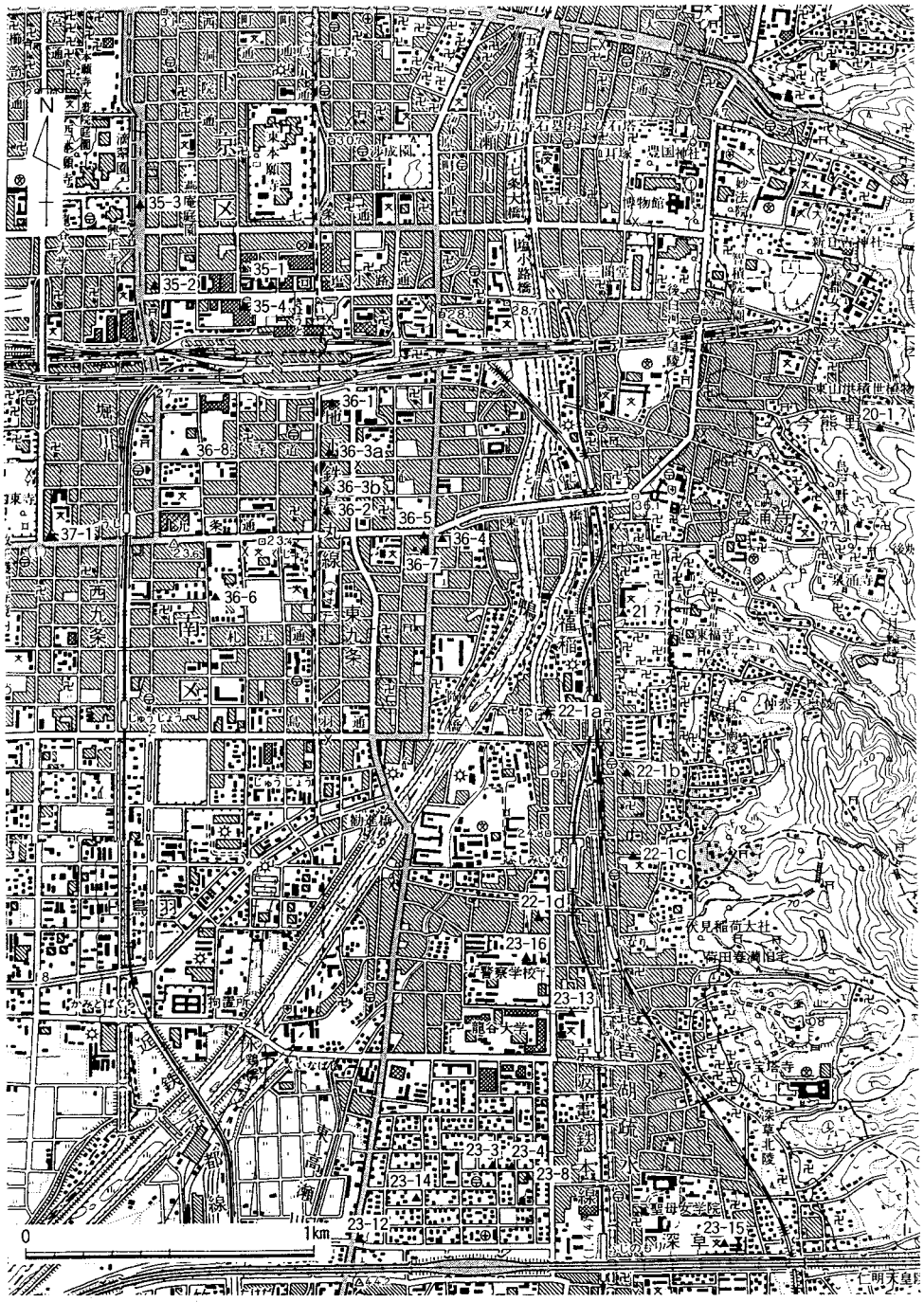

図88　関連調査地点(5)　縮尺 1/25000

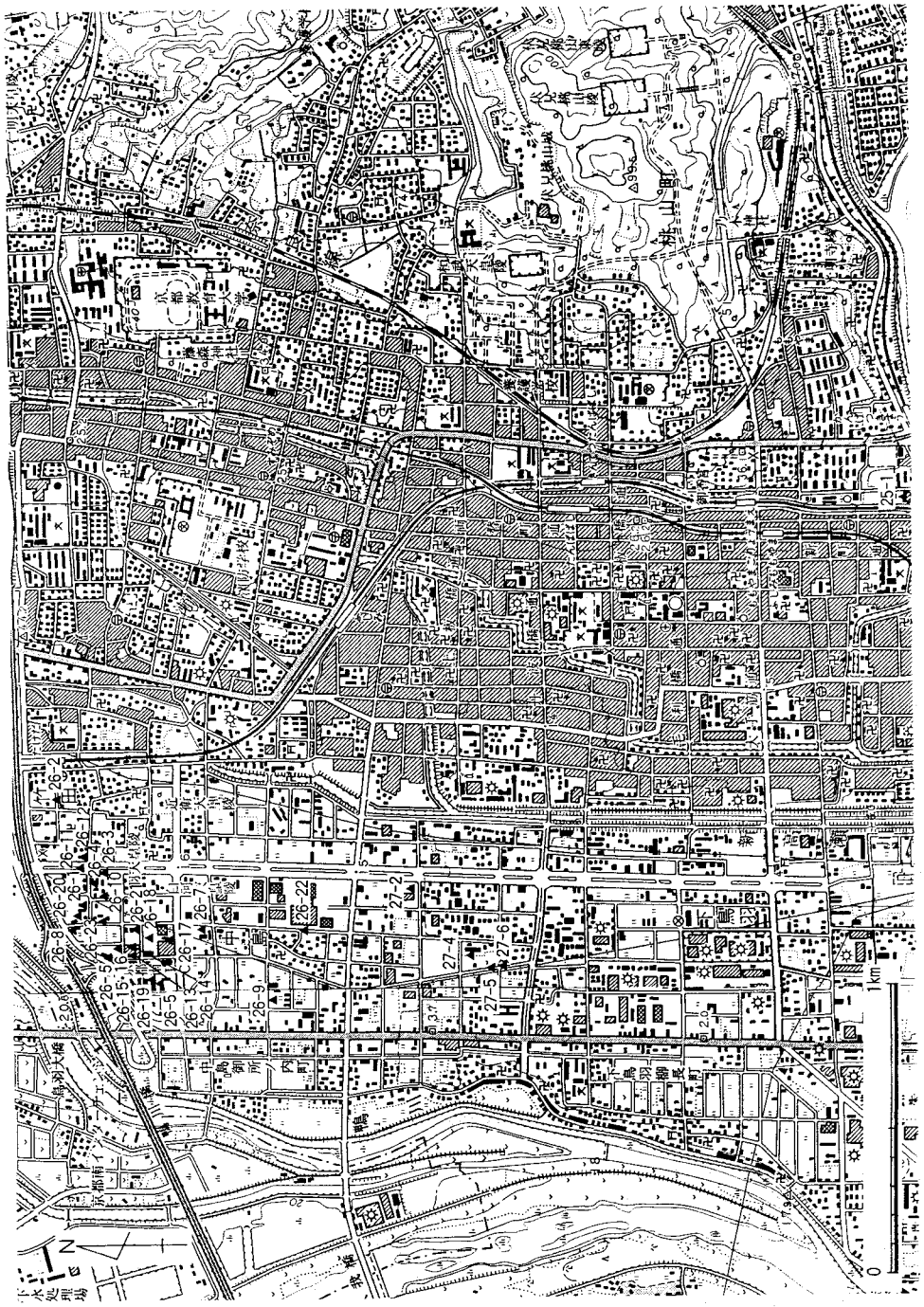

図89　関連調査地点(6)　縮尺 1/25000

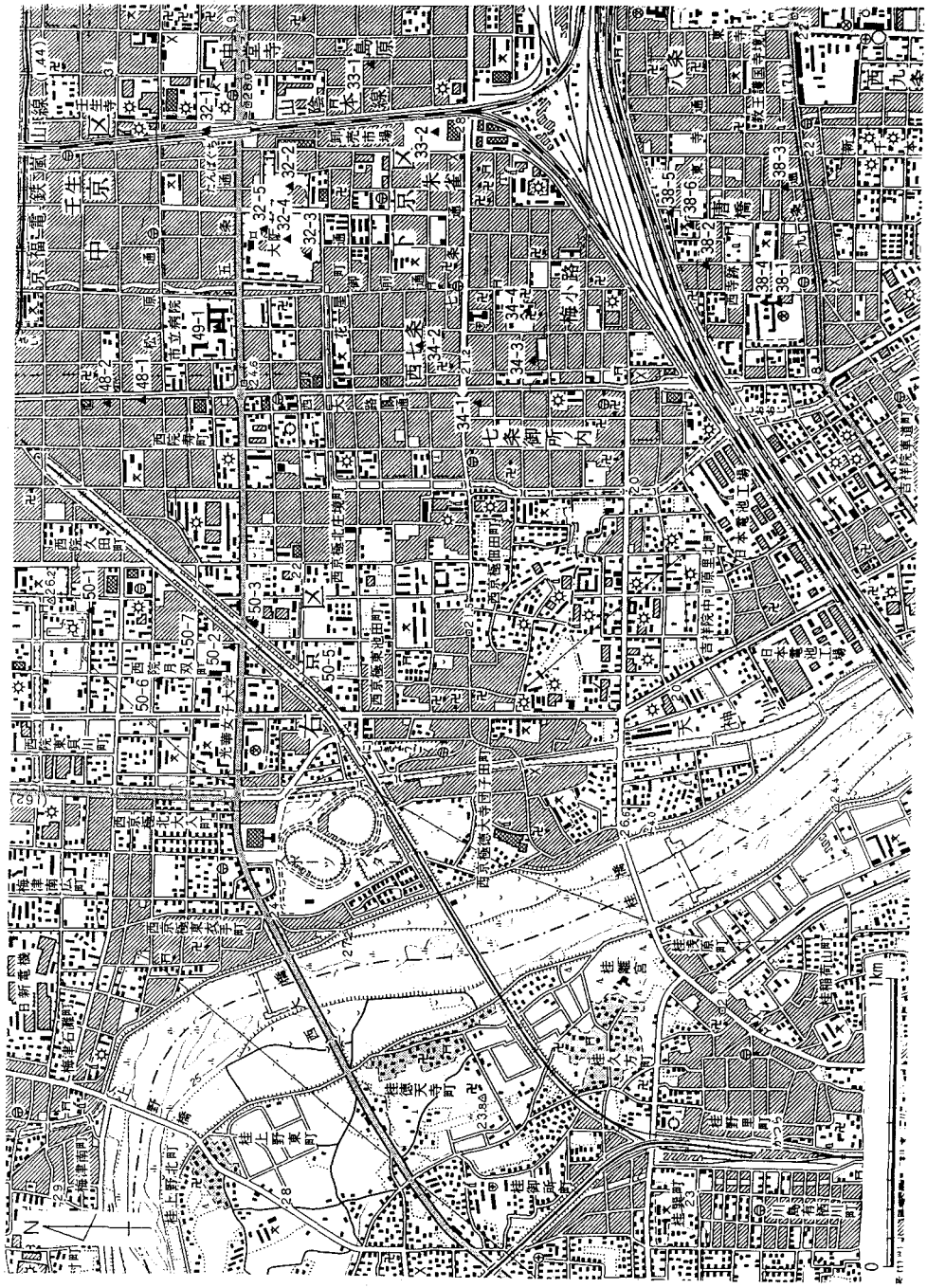

図90　関連調査地点(7)　縮尺 1/25000

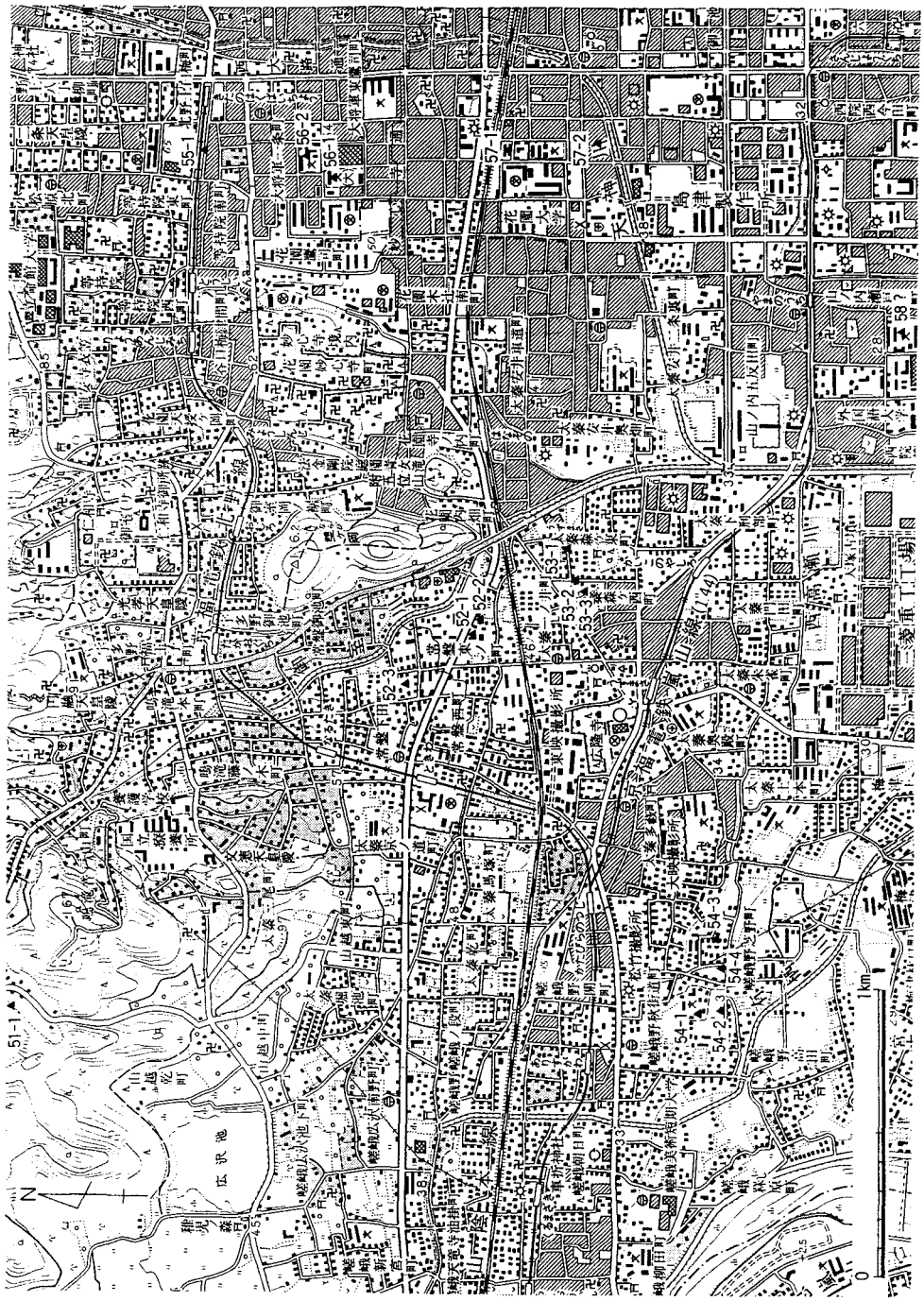

図91　関連調査地点(8)　縮尺 1/25000